

竹頭木屑錄

八

昭和四年十月下浣起筆

特別
14
1919
416



176681

竹頭木屑紙八

昭和四年十月下旬起書



○教菜園方を過る二三踏を踏め

一 御宴と梅帳 八本一巻

此の張紙の首を刻し字ありて
四帖毎に巻首に目録を載せ
巻尾王教金の跋あり、宗祇に
勅石のるり巻尾にあり、此人
師草書に名あり、從撰自在



藏氏平 瀨水清 京東

めを、我邦に北帳ある稀なり。此
帳の中川柳外の舊巻とす。

一 髻飾録 乾坤合一冊字

巻首に天啓乙丑三月西塘楊梅
の序あり。平沙黄成大成の著
す所を楊梅の注する也。支那
漆器の考概叙あり。北方の原
本の浅き又序にありし
志紙重と考きあり。余の初め
寫目するに、善し稀記の考
也。



一 林燕谷集

一冊

林燕谷の谷文晁の父也。北集文
晁父の詩を輯め、交わす。注家
の詩書をも以てす。通帯の集
と名を異し。吾と叙あり。
追々集も出せんと。幼せしこ
ときも果つて。続刊せし。や否
や巨細あり。こゝの初集也。

一 種おろし

一冊

一茶の稿を種おろしと云ふ。コロタ
イ、フ殿に附して複製せしむる也。

て元清教者なり、信り一茶書考の別
編として出版せんとす、その也、書首に
文欽の信あり、一人素鏡の名あり
一茶の信りあり、序あり、改竄あり
かゝる者、右の面目目羅あり、
書尾に解説教板を附せり、

一 涅槃像

一幅

竪二尺許の丹緑繪、改竄元年
號を欠け、も元祿頃のことと
思はる。



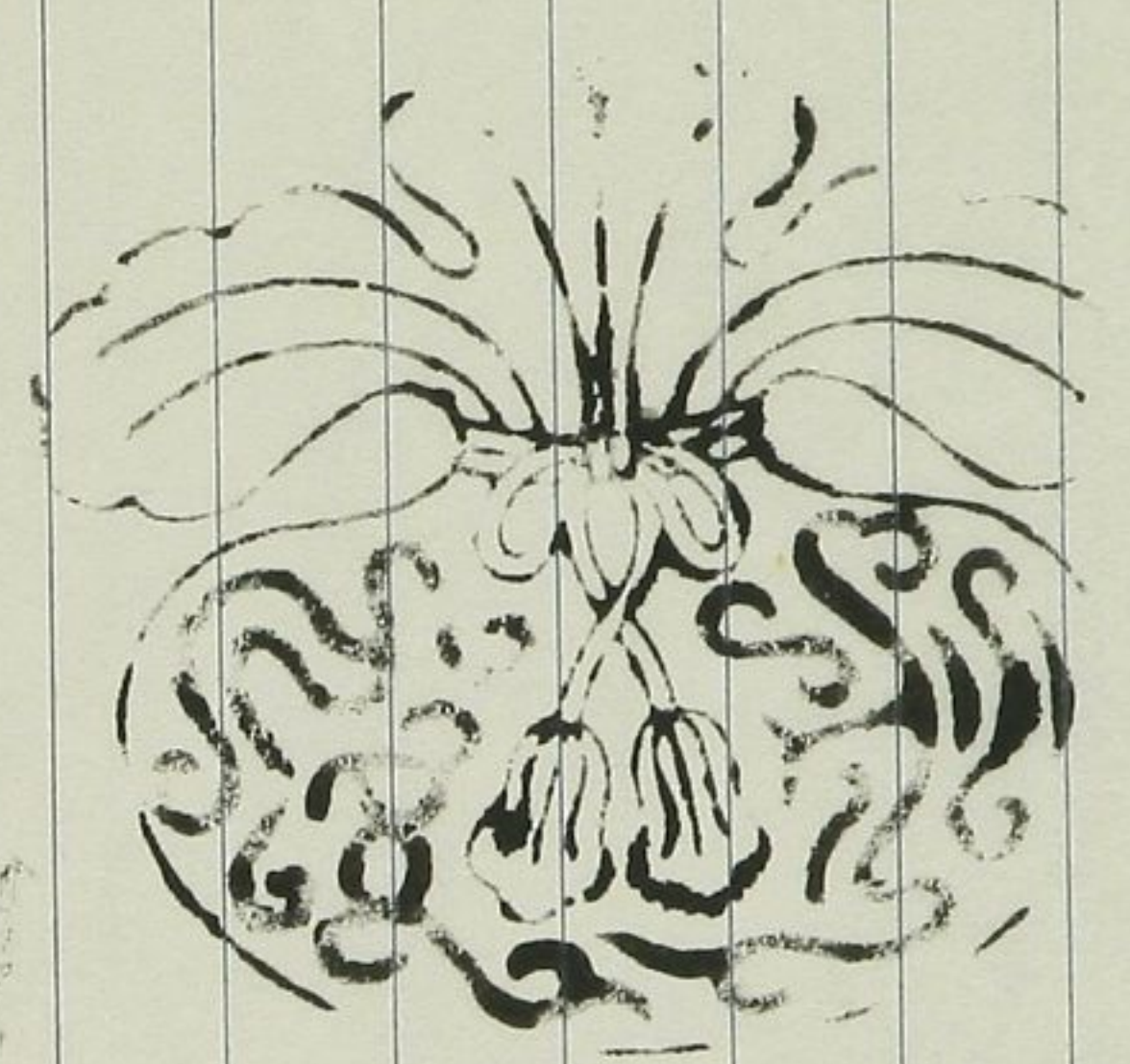
一 送彌年表

一冊

此書は原貞幹の遺著す、その世
に校本あり、伴信友後に諸書を
送彌瓶として補ふべき、巻首に追加
引用書の日を掲ぐ、其の數五十二行の
多きものあり、毎頁補筆ありき所を
し、此書の本は、栗田寛の校本に
作つてあるとあり、

〇余多く印を存せんとす、雅印の如し、一切願
みず、より偶々、骨背並、額をさきき古色

揃すべき木印一顆を見る、印蛇左の如く、
 七多分富藏の刻符を用ひたるよ、如し、
 印判師の刻するも六
 捨て難き古龜あり即
 う購ふて内く、如幼よ
 似似るんも持物の印
 中、んのかりる七敷て
 妨けるべきをいふ
 十月廿二日記



○藤田父教の斗末の次を得せしめんとして其の
 清の如し、右の如し、と名推して前月也

海と赴き海内遠道と云ふて三友漫海を説
 みたる筆記の二十の箇に滿り東京日々新書
 に連載てえん、藤田父の活字を一冊と
 して出版せんことを願し、(林野) 枚数の一
 冊と云ふう、送らざるを思ふて、(更) 更々
 余等日補説を述べて已ます、為め、二
 三追加し、ることあり、其の出版せん、
 熱海漫海を見る、枚数三つ頁に及ひ、余が
 晩年、誤し、行りの誤法や止、其のほろ
 一、二附し、誤し、未だ、未だ、未だ、未だ、未だ
 おろろ、おろろ、おろろ、おろろ、おろろ、おろろ、
 ず、この七番、余が自傳の一資料、す、家、存

すういことせり。

田上録

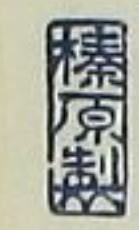
○此年秋御大典後、先皇を伴ひて上方旅行をな
し、此際、高倉詣をなさるべしと、京都清
土の長崎へ、為め果さるりしか、と、九月九日の
に、金ヶ原の御所を果せんと、家を見
し、御方、此處に、登山の途定まらば、高倉
ありし、登山、日使らるる、一日、清田坂、大
坂も、先皇の御所へ来り、此處に、清土を
市中にも見物し、六甲へ、あたらまを、清田坂、
天を、ひ、大坂を見、難波を、電車、投
し、十一年前、登山の折、雪、高倉、高倉下
といふ、ま、幸し、ま、ま、上の、自、動、車、か、ら、民



に乗る、今、高倉、高倉、約三十分の行程、電
線、延長し、高倉、橋、ま、ま、ま、石、高倉、
下、山、新、道、ま、ま、急、ま、ま、西、院、電
力を、要、する、為、の、特、設、の、電、車、ま、ま、高倉、下
り、乗、換、を、要、する、也、此、方、ト、ン、子、ん、を、十、七
ま、ま、高倉、の、を、以、つ、る、ん、心、句、配、の、急、也、測、り
得、る、也、高倉、橋、ま、ま、山、上、ま、ま、ケ、ル
を、築、設、する、の、奉、命、の、山、上、ま、ま、中、ま、ま、
二三年の後、一層、便利、を、見る、べき、也、今、は
高倉、の、ま、ま、十二町、を、行、き、ま、ま、此、の、道、道、
先、特、殊、ま、ま、多く、肋骨、の、如、く、折、ん、ぎ、枝、の、如、心
張、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、只、此、路

傍に乞ひの多きに成るべし。余の宿坊は清浄心波
の墓所にありしかるに山上に在りてもその
遠きより相高の距離あり、十二時のしるしの
頃と寺の遠しき。

此院は準本山格をありて山中にありて宿の院より
いつの頃にお満の毒杉院といふとも合保しきか
の規模ありて大なる、毒杉院は毒杉同心の創め
るよりして紀物徳川の島坊にこころしきと寺
傍の語を聞きしき、即ちその方おしき室
をいふるも庭の面してたゞ風致ある不
るが其意の即ち毒杉院と云く、先
年来りし時の東寺の長女此の院の住職



を置給ひて其の現任は坎宿坊
といふ傍りもとて寶龜院の住職なりし時余
一面淺あり、是れが轉任しむるも、その
の便利を乞ひし。

此行先事ありて其家の父母の為め、
其永代住を頼むるに之の任かを厨子入
の住牌とせしむ、且つ其家の住牌は漏れ
る先祖より代々の法名をも書き加く。他家
姓を冒し其親族三十余人の為め、其後住
頼み、其住を果して後、墓を築くを政を
出さる。墓所は日余の志を遂げしに
も、前に二回も訪ひしに、其細叙を略す。

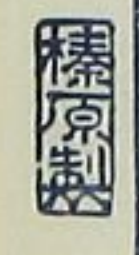
吾等をおもひゆる僧の余の家^がの二基の養に香菓
を献^てて鄭寧の後継^を。奥の院をおもひゆる
まか^し約二時間を費し、いろく買物^ををま^し
時を移し、夕まらう^に、^中院^を漸^やと^ゆ院^し、
皇別峯寺雲寶殿^をを^訪ふ^こと^をの^め
日^に正^しし^て寛^ろき^なう[、]幸^に右^の酒^の客^地：
ま^く、^教堂^を供^ちえ^んな^う、^ぬ都^会を^うく^し、^此行^を
大^改し^し和^みを^いや^しを^付い^なう[、]例^の物^を送^れ
現^の院^のお^もひ^の心^をい^ひ、酒^のを^物送^れ、^四時^を持^ち
し^ての^いま^を用^いい^ます^も及^ばせ^らし^し物^を送^れ
現^をま^かし^ぶる^あの^物に^神神^の、^晩会^を満^ち
た^う。



夜^のみ^や雨^をと^く降^り出^づ、あ^すも^雨か^も知^れぬ^思つ
ぬ^が次^に登山^の上^の心^をあ^しめ[、]朝^の拂^曉に^起つ^が
院^の例^をい^はせ^と早^く臥^どり^入る[、]支^那の^床に^臥
室^に設^けあ^る二十^畳の^大坐^をあ^し、こ^こを^も
鏡^をま^かし^ぶる[、]流^石と^鳥の^寺に^宿る^を
と^一笑^す、十二^時頃^に行^くと^も撮^り出^す、^{えん}
ハ^の戸^に一^切洗^てあ^る、電^燈の^光を^照ら^す、^電
電^山の^道を^入る[、]と^見へ^らり、^山の^氣候^は
ハ^山下^にし^てな^る、^原を^登る[、]夜^のに^臥
し^て、^座を^冷し^て、^熱を^得る[、]あ^るを^支
き^ます[、]天^のを^待ち、五^時起^きを^撮先^に
算^をあ^つて[、]水^を道^す、手^を洗^ふ、^盥敷^す

九心地

六時紋服と改めて道守かんで佛壇へ行目く、讀經
八段に始まる。その、位職を中央に十七十六七人
の僧侶をさしむ。その家の位職、新なる僧侶に
る和衣家の位職、と宗家の位職、とを佛前
する。其の下より宗家も、他家も七きり
親族三十、数人の法名を録し、名録冊をその小
宗部邊に並べあり。今朝の讀經の特
そ家の人の為めとする。よあるんばと尋常心
衝知禮を心し、思ひを式多故人に馳せざるを
得さし。



所謂二十、大師の像をも釋し、大師入、林の
前日特は自心の自依を此の院、空の多なること云
ふの七二十六師の縁がある。優福の寺とを法家
由世節七行偏と多く、古意を物や襖、見
此中、寺跡、房、基、が、流、入、入、と、横、向、を、書、し、
此、一、双、の、席、も、七、尺、多、分、なる。社名を元終つ
て任務の、を、訪、の、勢、時、後、話、を、交、へ、高、こ
度、り、喫、飯、を、七、時、の、外、か、い、頃、を、し、み、と
前、程、の、両、七、師、の、早、く、寺、を、辭、し、皇、劉、寺
寺、其、他、を、訪、え、ん、と、志、妻、の、訪、の、任、か、せ、破
格、多、く、の、布、施、を、空、の、進、し、去、る、日、跡、み、院
主、の、訪、の、位、か、せ、金、地、短、冊、二、枚、の、目、押、直、毛

して辞して去る

彼僧の安否内を先づ見せり。室を發彼より、こゝの
各寺院の寶器もが陳列しあり、丁度此佛十
年程前よりありし時、跋成の跋るんとも入りて見
る。今もか如のそり、流名に多し。此寺の
寶物のありしもの多く、列名の大なり。此寺の
屬する、多し。此寺の寺の境内、多
内なる。こゝの先帝、南都の聖者の火火上し
り。金物を今復見せんと工書と進めつゝ、
る建物をせん。高子六七分、出束とあり
やうな見受け。又上前の金物の、果木湖
にも、建車と、山建、染の、高目、い

建車

てあつた。其の火を、此の遺域の、まじあり。此と
復興か成つても、壯麗、此、唐、舊、堂、及、ふ、
こゝの、寺、入、つ、て、法、念、を、
説し、秀次か、皇、公、と、
室、一、説、し、時、改、て、十、一、時、
心、の、印、と、未、此、の、を、
と、就、い、た。

ゆ途、風、多、し、就、て、特、に、感、多、し、こゝも、無、つ、
く、楚、山、千、年、向、の、
山、海、の、如、く、不、世、
一、も、ま、を、
た、あ、る、こゝ、と、感、
我、も、時、代、
此、の、室

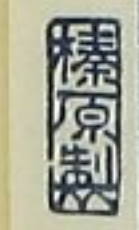
坊と崇七有りうく危ういともあつた。根来や粉河
の各刹の七豪傑の四怒に解るんば一朝焼出帰
を祈らざる有りう。此山かひとり祀を免かん
れん。此山に一人の外交僧があつて所より豊公を
取り入つたかゝりである。此僧は眞其と云ふ山か
後より眞山と称するもあつた。七とい武士は主
家の亡びのれん若心僧よりあつたのだといふか
ら、武將を操縦する術のご得も衆にたと
へる。豊公飽中此僧を信じて此山に寺を建て
し、寺領を殖やし、その恩典を施し、山
の考めある坊を得た。後より眞其の考め、眞山
寺といふ寺を建て、やつた。いふ、えんから眞其

眞其

八興山と稱するもあつた。京都より大坂と往き、此時
七此僧が豊公の病を其往き、南つたのひあつた。此山
の七此僧を思へるといふか、この寺の七此僧の
交家の有眞の山、眞其の山、大なる関係があるよ
うである。ことを駕の内のいふあつた。此山の
墓所、あつた。多く、豊公の武將の墓が多
く、徳川朝よりいふ、法大なるが墓をこゝに、連
るを例といふ、七此僧、眞其の山、帰依か範を示
し、此のひ、豊公の此山、影射する、こと、願ふ、大い
あつた。やう、感も、いふ、眞其の山、上、人、七豊公、臣家と深い
因縁があるから、大坂の後、ひ、眞其の山、大坂、方、あつ
た、か、眞其の山、家、が、亡び、た、の、ひ、眞其の山、及、い、ん、こ、と

を恐るゝ楚山と、地縁の形を取、他の方面に逃れ
たると山にの安堵を計る、板け目か無つたと云へ得
やう。

十二日大坂へ戻り一泊の上十三日奈良見物に赴
く奈良良行も内子の為め、余は板敷のこま
ごから格別お鳥を感しうらうらか法隆寺
を訪ふ所の縁由如説の余々無つたに、壯年時
代にあつたから、今次建物佛像らいと見て初
めて板味を感した、こまのわ少からうあつた。流石
又此寺にあるその、古のい丈の高麗山にあるあ
らうの道か、いふ事を異うしてゐる、寶庫に納
めてある雲を砕の、いふむ無涯を楚山に得る



このがあつた。一日晩の後、薬師寺其他の名刹
を板敷して、汽車でたふさまひ行き春日神社
へ行し、其の附近の名刹を探つた。いつ大ふら
遊んむ、其の附近の、いふ春日の境内に、今、
公園と云うてゐるが、地境が唐らしく、老松が
ククとしてゐる、昔日原の、神社が、あつた、若草山
や三三三山と、いふ、いふ、宛然、恰も古物を運べ
たやうな、氣がある。猿渡の池や、元興寺の遺塔ま
つたか、くると、更なる、昔日原が、復た、いふ、公園の地
積が、百六十、高ぼ、七、あつた、いふ、いふ、祝賀の歌、
粘ても、日本第一と、いふ、いふ、いふ、昔日原、七、
百、平凡、いふ、いふ、春日社の、赤塗、いふ、いふ、持造、七、一、種

若生の
及び

異つたよみが、積り年の向う之れと見るの、画も亦
及ぬぬ味がある。三三山、荒岩山の、重なり、樹木
を、焼く、軟味の、ある、を、ハ、背、中、赤い
建築、二、對、一、と、さ、と、心、の、か、の、如、き、趣、か、あ、る。殊、
鹿が、圓、の、徘徊、し、て、行人、二、也、の、目、き、あ、の、傳、し
い、態度、が、粗、ん、て、あ、る、を、ハ、一、層、の、風、貌、を、添、く
人、と、し、て、別、天地、に、あ、る、こ、と、を、思、を、あ、さ、し、あ、り、
自、分、が、性、年、地、分、圓、と、知、人、に、映、の、鹿、の、教、七、少、う
つ、た、か、今、い、あ、強、し、ん、七、る、類、七、つ、と、内、に、居、る。是
れ、の、場、の、や、う、な、もの、を、山、路、出、来、れ、と、見、と、見、る、と、
無、苦、の、情、が、圍、人、に、あ、り、て、海、音、刺、吹、の、聲、を
支、く、と、あ、る、日、を、こ、く、集、ま、う、臥、す、と、歩、へ、か、鹿

漢京製

ハ一切魚類、其地の魚を食ひ、子七、一、百、一、
と、十、七、月、行、て、産、す、と、い、ふ、か、ら、人、間、に、存、し、
高、か、あ、る。鹿、七、人、間、に、粗、ん、て、市、中、に、も、横、行、し、
高、産、の、を、と、し、て、う、つ、つ、と、公、物、を、奪、ひ、去、ら
る、こ、と、を、あ、が、高、野、山、の、途、中、に、出、遇、つ、れ、と、
二、較、べ、る、と、幾、程、を、あ、る、愛、と、し、い、よ、あ、り、
あ、る、外、國、の、貴、族、の、お、在、る、の、飼、養、し、て
る、事、が、あ、る、と、う、い、ふ、か、あ、る、の、如、く、放、つ、て、自、由
に、任、し、と、あ、る、所、の、世、界、の、例、か、う、い、と、云、の、ん、と、あ、る。
春、の、の、本、地、の、鹿、崎、に、鹿、崎、に、も、山、年、を、鹿、が
あ、る、の、か、い、と、今、傳、く、と、大、宗、の、特、別、の、風、貌
を、心、の、材料、と、う、い、つ、と、あ、る。進、々、あ、る、と、い、ふ

見えよめあたらしが、何れも強くて子困るかと思
が可なり。お母のおいしさを兄へ口伝し、角
波の考の、保彦を要するよめである。

北行内子をお任し、大改のゆゑ京都の友人
のハレ知さず、今放漫筆池の多く、和歌道
楽しむと申した。大改の施設、花家が料理屋
を凌ぐ割烹をや、内子を満足せしむる、胡
麻豆腐を急こしらへ、流石と時る、かま
とらうり、此考の、失敗し、大改料理の
料、播半、ありと、六甲の、日蓮宗
唐土を出し、午飯を合、かこい中
分、無つ、京都の、内子が、平定、かこいの、芋、かこい

を、かこいといふ、かこいの、朝めしと、度、かこい
田山、かこいまひ、出、かこい芋、かこいを、かこい試、かこいみ、かこい
此家、かこい公衆、かこいを、かこい式、かこいを、かこい扱、かこいを、かこい扱、かこいめ、かこい
やつ、かこいあ、かこい朝、かこいめ、かこいと、かこい合、かこいい、かこいも、かこいと、かこい改、かこいか
あ、かこい、かこい、かこいと、かこい芋、かこい、かこい自、かこい合、かこいの、かこい好、かこいま、かこいま、かこい
この、かこいあ、かこいが、かこい流、かこいる、かこいに、かこいう、かこいま、かこいく、かこい人、かこいら、かこいの、かこいせ、かこいれ、かこい。かこい幸
祿、かこい寺、かこい境、かこい内、かこいの、かこい要、かこい事、かこい、かこい自、かこい合、かこいの、かこい二、かこい家、かこいも、かこい日、かこい取、かこい買、かこいの
家、かこいが、かこい此、かこい年、かこいも、かこいあ、かこいの、かこいを、かこい伴、かこいつ、かこいれ、かこいが、かこい今、かこいが、かこい廿、かこい書、かこい画
合、かこいに、かこい出、かこいう、かこいけ、かこいた、かこい。こゝも、かこい胡、かこい麻、かこい豆腐、かこいが、かこい出、かこいれ
が、かこいこゝ、かこいの、かこい大、かこい改、かこいの、かこいゆ、かこいら、かこいい、かこいよ、かこいめ、かこいつ、かこいれ、かこい併、かこいし、かこい京、かこい改、かこいの
胡、かこい麻、かこい豆腐、かこいの、かこい軟、かこいか、かこいか、かこいけ、かこいよ、かこいの、かこい七、かこい味、かこいの、かこいや、かこいう
可、かこいよ、かこいめ、かこい自、かこい合、かこいの、かこい家、かこい産、かこい又、かこい心、かこいま、かこいし、かこいの、かこいと、かこい異

異國叢書通信第八號 編輯兼發行人、東京市京橋區新築町三丁目一番地 奥川 榮 (昭和四年十月二十日)

全壹册近刊

異國叢書通信

第十一回配本に際して

譯註 文學博士

村上直次郎

今回の配本は、豫約の慶元
オランダ書翰に代るものであ
る。豫約の當初には慶長元和
年間に、我國に在留したオラ
ンダ人の書翰を集めて、第十
回配本の慶元イギリス書翰が
如きものとす考であつたが
ケンブル、シーボルトと共に
に二巻となり、我國とオラン
ダとの交通貿易史料が豫定よ
り多くなつたので、ポルトガ
ル、イスパニヤ等關係の資料
に改めたらばと言ふことから
今回の配本となつた次第に付
豫約者諸君の御了承を願ふ。
本叢書も次の石田學士の日
本關係西籍解題で最初豫約の
巻數に達し、又、近く新村村川
兩博士や羽仁學士等が出來
て、全十五卷完成となるが、
駿南社では引き続き豫約を希望

「シヨンセーリス日本渡航記」の一節
譯註 文學博士 村上直次郎
（一六一三年八月二十七日）：
大坂のすぐ向ふに、河の他
の側に堺 (Sakai) としふ他
の大都市がある。○堺は大坂の
距て、大和川畔の港市である。
セーリスが大坂を貫流する河の
意味で、其他の側に堺があると
いふのは、明らかに傳聞によつ
て記すものであつた。それは大坂ほ
ど大きくはないが、それでも
附近の諸島の凡てと大なる貿
易の行はるる都市である。宿
（八月）二十八日。夜予等の宿

予等は此地で皇帝○將がミ
ヤコ都及び大坂を抑ふるた
めに、三千の成兵を置いてあ
るのを見た。此の成兵は丁度
予等に在る折、其の交替が行
はれたから、予等は最も武人
新隊が練り入るのを目撃し、
み、十横列毎に、五十人組頭
（Captain of title）と稱する
士官一名づゝ居て、始終隊伍
を甚だ整然たらしめる。先づ
第一に彼等の銃隊即ちカリヴ
（Captain of title）と稱する
（Musketeer）は、
予等は最も武人
はれたから、予等は最も武人
新隊が練り入るのを目撃し、
み、十横列毎に、五十人組頭
（Captain of title）と稱する
士官一名づゝ居て、始終隊伍
を甚だ整然たらしめる。先づ
第一に彼等の銃隊即ちカリヴ
（Captain of title）と稱する
（Musketeer）は、
予等は最も武人
はれたから、予等は最も武人
新隊が練り入るのを目撃し、
み、十横列毎に、五十人組頭
（Captain of title）と稱する
士官一名づゝ居て、始終隊伍
を甚だ整然たらしめる。先づ
第一に彼等の銃隊即ちカリヴ
（Captain of title）と稱する
（Musketeer）は、

予等は此地で皇帝○將がミ
ヤコ都及び大坂を抑ふるた
めに、三千の成兵を置いてあ
るのを見た。此の成兵は丁度
予等に在る折、其の交替が行
はれたから、予等は最も武人
新隊が練り入るのを目撃し、
み、十横列毎に、五十人組頭
（Captain of title）と稱する
士官一名づゝ居て、始終隊伍
を甚だ整然たらしめる。先づ
第一に彼等の銃隊即ちカリヴ
（Captain of title）と稱する
（Musketeer）は、
予等は最も武人
はれたから、予等は最も武人
新隊が練り入るのを目撃し、
み、十横列毎に、五十人組頭
（Captain of title）と稱する
士官一名づゝ居て、始終隊伍
を甚だ整然たらしめる。先づ
第一に彼等の銃隊即ちカリヴ
（Captain of title）と稱する
（Musketeer）は、

(1)

つるの口、自分らもいゝ宮子家庭のをよひます
つけんども、大張り一程の風味もある。高野の
ハ三食を喫し、三食共異つた精進
料理を出し、此の感心した、材料は松茸
も、栗も、油揚げも、はまのたけ、大根、
さつま芋、菜菔も、あつた。油揚げも、
さつま芋も、エ瓜があつた。二の膳もつぎ引くと
こゝろもむつけた。引物二食出し、此が一回
ハ白胡麻をつけた。餅（日形のもの）の砂糖
をかけた。一回の物は、
かぼくもあつた。宇治黄、蘇、の善多、
理るゝと、較へると、優ること、式もあつた。

東京製

の制限に煩はされず多少とも... 實際の役に立つやうにと思つたからに過ぎない。

かくて第一類は少し意味を... 廣めてこの部にマルコ・ポロ、メンデス、ブレントー以下モ...

四、五には幕末のものが多... 多きに居ることとなる。

概観出来るやうに簡單なる... 米人の日本研究史の如きもの...

花見朔已

「異國叢書」のうち、私の受... 持ちである「日本關係西籍解題」...

未刊の別もあり、更にサトウ... 氏が始めて解題した種類の布...

然し大體の結構としては... 一、西本史

二、西本史

石田幹之助

し其く此一七格まらるるにと書つて石里子音か
ら聴へんことがある。

保君の考証家む狩本橋翁の並流にありて若
書り少くもそののハ少くも、橋本の
史と全部岩崎家の静嘉堂文庫に存
してある。此人の大努力の半生の心血を瀧へて

原此字典を徹頭徹尾来々原書に溯
り去興^り校訂したことを其の萬事の一端に記し
る萬葉通の末村正辭博士も此の門下の
人である。此の初年、^り大木春任
の特ニ保君と親善ありつたと交へたことある
の内閣

此人の著書に言及れしをみるに、餘程著書多し
つれもとい百石ばかりの御家人の出だが、先代
に深川の不動の像を置いた人七あり、
此と云ふから相あり、富んぶ家むありつたと見え
る。此人の著書に言及れしをみるに、餘程著書多し
先代の墓塔の途中、古道層具念を覆き
こむと、大黒天を母描いた幅に、大晦日病の
本の金つくりと横の女をのを見て、如何と感
ある所がある。是れから、俣喜自から奉じて、一
層富饒とすつれ、^り交反や
從僕らあり、對して甚く寛大があつたと書
つて、赤堀又次郎氏から交へたことある。

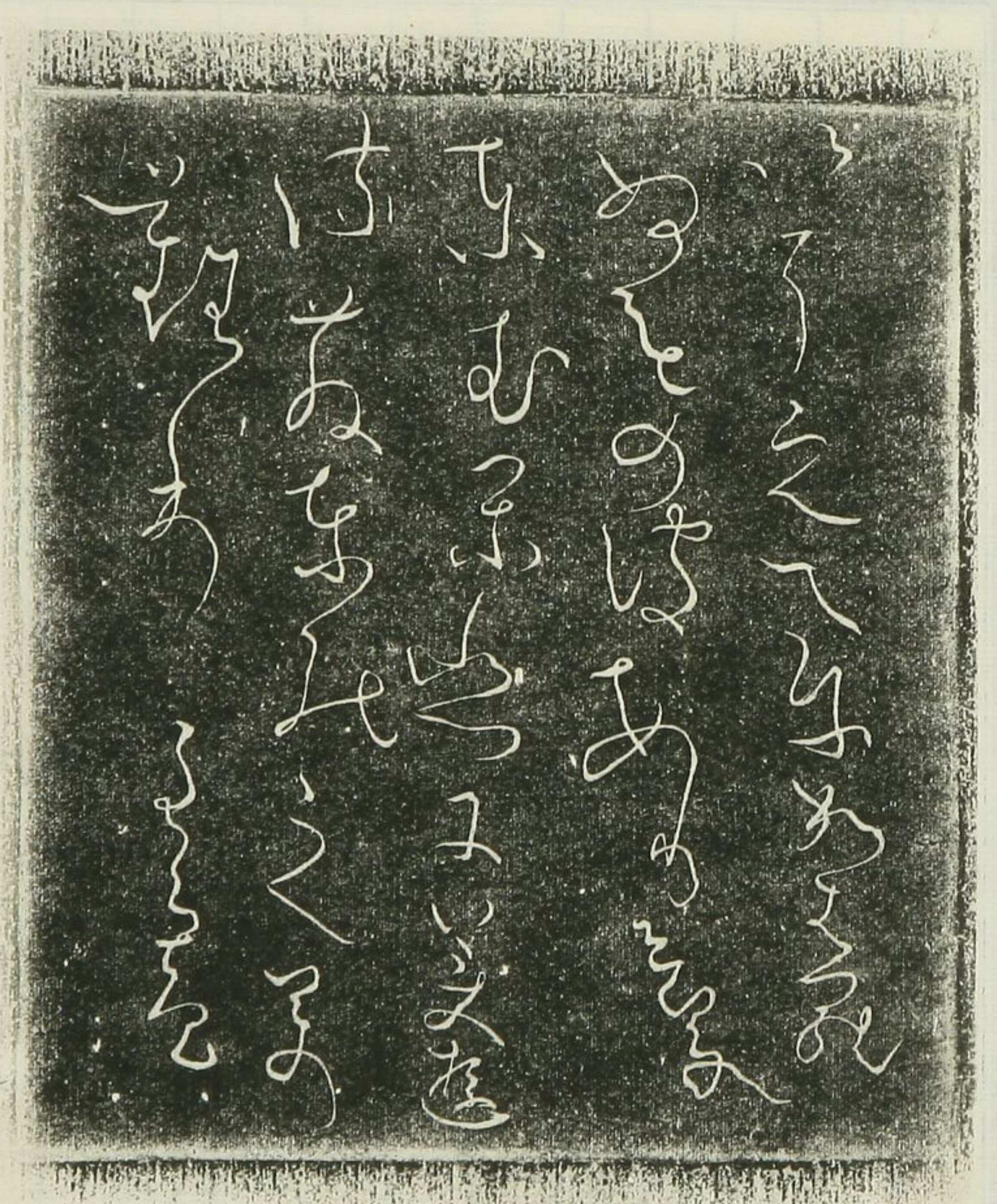
○此夜は月夜劇の情物後援会が大隈
 評量に催した劇をのり印劇の贈答会を
 幸と親にあらはす迄の道
 心良寛の心を等しく因
 おかありの心物に思味
 を感し此守田勘延ハ
 流名に良寛の心を
 く思ひぬ。良寛の心
 んに二三の情物を私
 ありぬ内、後、私

第二 良寛と子守 一幕

坪内博士作
 安田靉彦氏舞臺装置
 常磐津松尾大夫
 常磐津文字兵衛 出演

帝劇に上演された時にも大好評を博した新舞踊
 劇です。今度は配役にも少しく變更を加え、舞
 臺装置にも新工夫を凝らしました。それに常磐
 津は松尾大夫、文字兵衛兩氏が出演してくれま
 す。良寛研究の盛んな今日見のがせない傑作で
 あり、清新な藝術品であります。

のこぬら(知らぬら)つらぬら(つらぬら)が、良寛の味
 家の情物に催した劇をのり印劇の贈答会を

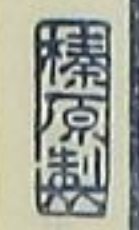


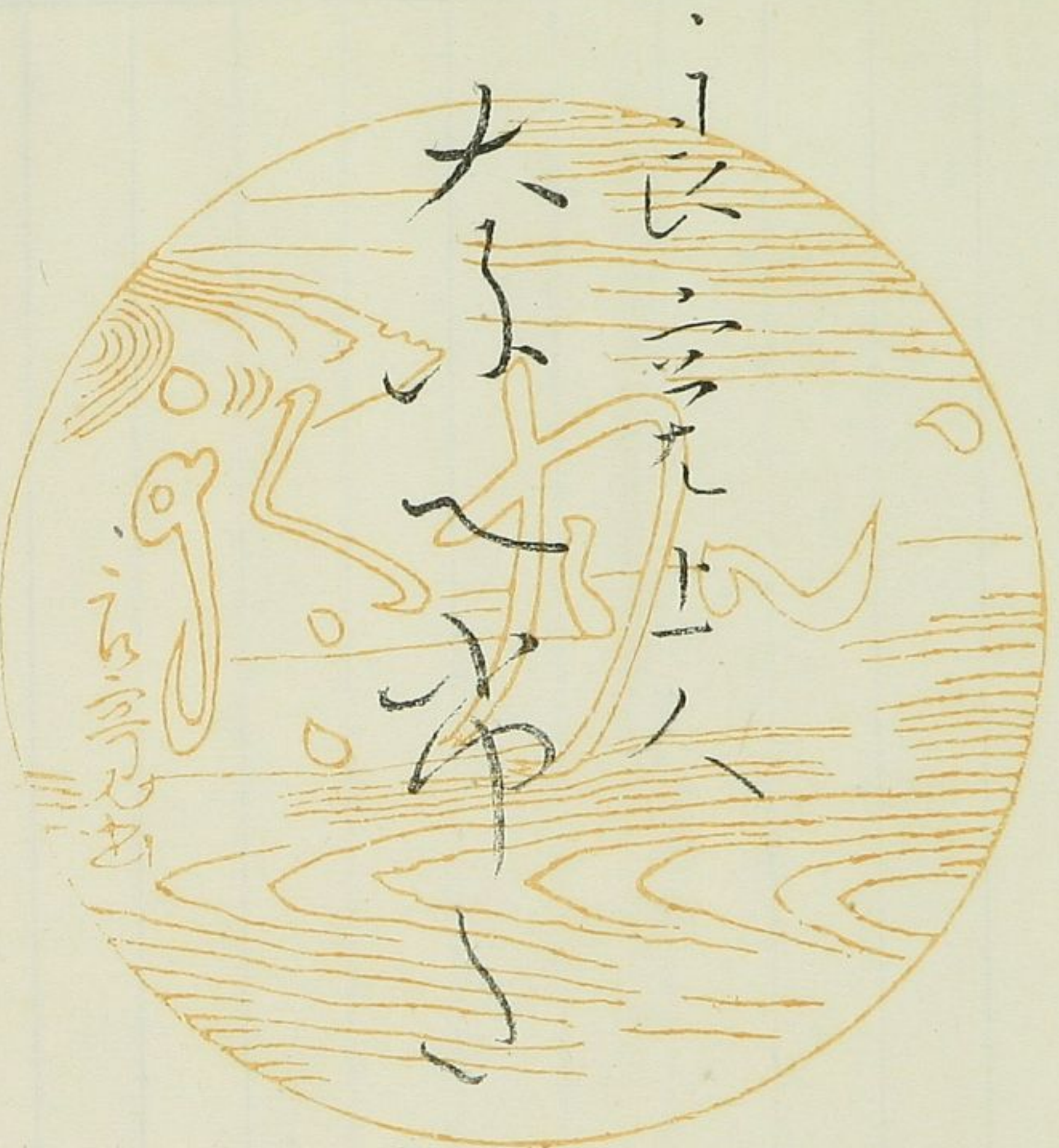
いにしへに
 かわらぬものは
 ありそみと
 むかひに見ゆる
 佐渡の島なり

良寛

鍋蓋落
 鴈本舗

(新潟高橋真成館蔵複製)





良寛上人の真跡御歌の寫して上人の御徳を忍ぶ便りにも添
なほ別に添へました刷り物は當地良寛堂内の塔婆にほられて
さ苦心力作しましたものであります。

善後
大正
何

善後堂

良寛上人或時國上の山を下りて日頃親しく交はつておた故が花
の四赤原郡國上村の解良叔問を助けられた。

その時桶屋が庭で働いて居た。上人しばらくその働きぶりを見て
居られたがふさ傍にある杉の柵目で作つた鍋蓋に目をつげ何も
云はずに静かに之れを取り上げ貴い玉でもいだくやうにして坐
敷に入り直に筆をとり感興に任せて書かれたのが『心月輪』の
三字鍋蓋の圓きは上人の心を表はし三つの字は圓い心の動いて
ゐるが如き趣をなして上人昏中の神品である。

この頃は早苗とるらしわがいはは
形を愚にかき手向こそすれ
さいふ歌をよまれた位百姓のわざを貴べたものですからこの
落雁も専ら穀類玄米玄麥豆小豆粟類を原料として其持ち前の色
と香氣をもたせ風味ばかりでなく滋養と保健とを兼ねしめやう
と苦心力作しましたものであります。

良寛上人 良寛上人 良寛上人
善後堂 善後堂 善後堂
講製元大 講製元大 講製元大
黒 黒 黒
善後國出雲崎町 善後國出雲崎町 善後國出雲崎町

良寛上人の真跡御歌の寫して上人の御徳を忍ぶ便りにも添
なほ別に添へました刷り物は當地良寛堂内の塔婆にほられて
さ苦心力作しましたものであります。

良寛上人の真跡御歌の寫して上人の御徳を忍ぶ便りにも添
なほ別に添へました刷り物は當地良寛堂内の塔婆にほられて
さ苦心力作しましたものであります。

爰にその附属の印刷物を収めおく。十月廿八日
 の大隈別邸より熊子の自の訪問を受く。余が古稿
 を尋ねる為の事を往々の祝名を贈らんやう。嘗て
 二回訪問を受けしことありし。自分も其の
 為の玄函を乞うんやう。此方ハ在書するに
 為の寸と受けし。怒り得てまゝ。此人の懇
 切なる平字感激する事。兎も前日早
 稲田の吾等。為の祝名を乞ふに際。撮影の
 法動映畫を此方人の後。供し。且つ未
 却記念と。訪ふに庭。またたらんやう。其を
 法動のレンズを入んやう。どこにも是る法動
 映畫の機械備はるやう。七あ。故。恐。

標原製

此の映畫の跡と。人々。よ。一日を。其の
 を付して。別邸より行く。十月二十日。
 口訪問書状を漁つて。時一二の。を。

前歴夢影録

二冊

此者ハ光緒二十二年。吳徐康子。其の
 撰。傳。文。居。金石の類。を品。鑑。し
 たる。其の。致。古。家の。指。南。と。する。よ
 び。ある。

令節西史

二冊

此書の倭古印を模刻して解説を
 附したるものなる埋蔵財産考や貞
 幹の七印譜と似寄りのものがあるけ
 んと多数の古印譜も多々あるの自
 分の珍花としてのみ同書全部を愛
 此時より千部以上あるものよを
 江表する願客からいづれも古印の
 ことらうてんせあるの印譜つと
 り七印譜 價を低めあつたのを
 購入した

書目の目録

一

京都の好出家杉浦五郎(三ヶ倉)
 リ子へて自記を編して刊行の書目
 目録も書かされた可なりは内
 である。その中に浦田のよ
 動の目録を刊したことも無い
 の書もその中に因難であるか
 美名もその中に頌つたもの
 十月三十一日

満洲出土金石帖

此帖野に多内じりて客を
 都勤印の碑。書執母丘侯と

しつ方向能を征伐せしめし時のことありし
海軍の隊長の碑、外に北魏の碑、
萬佛堂を連てあるものあり、
最後二十支の画像あり、
ありしものあり、
（少きものあり）

今方の随筆を春城漫筆と名づかへばし
かたの初ねの如くである、
（加布に）
十月一日



私、毎年一冊の随筆を出すことが近年の例とな
つてゐる。夏の毎年の中休暇は無聊を遣は
え、漫筆を走すのがいつしか積んで原稿とな
るのだ。本年の夏も夏の間も暑気が烈しく
身の置所は困人地位、
あつたが、
の會合も暑中概も見合は、
あつた、
皆主である。
私、家長一母のつらさを淡々と感した。そこ
に止まらず、まぎるの為めは筆を把り始めれば、汗

「若くとも」

保

と流しての執筆、決して愉快である。保、日横九のこと
まゝのこと、ゆるぎなく、毎日の筆を続けると執筆
の間、^{（保）}「保」一日でも執筆を怠ることを却
つて不愉快を感ずるやうに思う。日中六十日
間、その通して筆を執り、どうやら日者氣と戦
ひ果せた。身産持ハ則ち此の随筆である。
私の随筆、いつても内容が空疎で悲憤である。此が
のも亦同様である。随分問題の多い世の中である
から、政治経済社会の事相を就て書けば材料は
豊富である。相違ない。保し政治や社会の事相の
問題が解れて、政治経済の筆を揮ふこと、私の

柄に無い。随分荒い頃、悲憤、^{（保）}慷慨、^{（保）}羅
つて世間並に此等、活問題、^{（保）}縮んじ、^{（保）}もあ、^{（保）}か
今、全くまゝか、^{（保）}にうら。實、日中の概、^{（保）}
情、川に汗を流して世相を對する不平を漏す、^{（保）}
●^{（保）}莫、^{（保）}げ、^{（保）}て、^{（保）}る。機械文、^{（保）}の、^{（保）}真、^{（保）}只、^{（保）}中、^{（保）}又、^{（保）}立、^{（保）}て、^{（保）}
毎日、^{（保）}盤、^{（保）}敷、^{（保）}金、^{（保）}日、^{（保）}を、^{（保）}送、^{（保）}つ、^{（保）}て、^{（保）}あ、^{（保）}る、^{（保）}が、^{（保）}わ、^{（保）}ら、^{（保）}ず、^{（保）}い、^{（保）}
る、^{（保）}と、^{（保）}つ、^{（保）}ら、^{（保）}い、^{（保）}。どう、^{（保）}か、^{（保）}し、^{（保）}て、^{（保）}切、^{（保）}め、^{（保）}し、^{（保）}日、^{（保）}者、^{（保）}中、^{（保）}に、^{（保）}ど、^{（保）}け、^{（保）}も、^{（保）}神、^{（保）}往、^{（保）}
と、^{（保）}地、^{（保）}め、^{（保）}て、^{（保）}い、^{（保）}び、^{（保）}り、^{（保）}し、^{（保）}て、^{（保）}見、^{（保）}ん、^{（保）}じ、^{（保）}と、^{（保）}わ、^{（保）}思、^{（保）}ふ、^{（保）}が、^{（保）}私、^{（保）}の、^{（保）}傳、^{（保）}
手、^{（保）}書、^{（保）}り、^{（保）}の、^{（保）}ま、^{（保）}の、^{（保）}情、^{（保）}だ、^{（保）}と、^{（保）}あ、^{（保）}る。私、^{（保）}の、^{（保）}家、^{（保）}は、^{（保）}長、^{（保）}ら、^{（保）}ず、^{（保）}と、^{（保）}も、^{（保）}静、^{（保）}
閑、^{（保）}な、^{（保）}る、^{（保）}境、^{（保）}地、^{（保）}と、^{（保）}身、^{（保）}を、^{（保）}置、^{（保）}き、^{（保）}私、^{（保）}が、^{（保）}好、^{（保）}む、^{（保）}ま、^{（保）}す、^{（保）}る、^{（保）}筆、^{（保）}
を、^{（保）}弄、^{（保）}し、^{（保）}て、^{（保）}見、^{（保）}ん、^{（保）}じ、^{（保）}と、^{（保）}ま、^{（保）}も、^{（保）}う、^{（保）}い、^{（保）}こと、^{（保）}を、^{（保）}毎、^{（保）}夜、^{（保）}考、^{（保）}へ、^{（保）}て、^{（保）}

翌日朝業心まじりかき筆。六十日間の日課である。私に北池業の筆集中、偶然新世術頭が異國物の影の砂時計を獲たので、それを案頭置き、日々の侶伴として、蒙昧時代の時器といふへ、機械細工を全く離れ、青銅器を爲す時器の役を爲すものとして。

頗る珍重すべきものである。私清洲の境地、身を置くべき、このあたり、折今少あり、其のと思ふは、此の時器、機械文の駭き、一さを冷笑するから、か思ふん、私と静岡の境地、道すく、其のつて大い、効があらう。本末北池業の中、さ、砂

時計、此の所感と録し、此から、茲より多く、言ひる。

要するに私の逸業、閑身目の記録、思き、實に無用のものがあるけれども、無用之用と云ふこともある。若し世間多くの人々の内、**無用に刻に**煩いさん、**心體の地**後を思ふこと、私のこと、く、ある、清洲の境地、身を置くをて見たいと思ふ人があつたら、私の無用の書も、式分用が見出さう、か、知ん、私に較べ、之を期待すること、き、不強の者、此の漫筆が聊か、無用の用を為す、私の六十間の、徒再びる。

○稀古襖物今の手紙に濱刺持物被に襖物
本海別今をとりあうに廿今の赤安田長次郎
毛布の襖物本三十一人集集の備ん紙の
意匠のある集を詮考して元々意匠の或
る集に片字つて集匠してあることと感ついた。
薄べらの集をいハ襖紙の意匠の示るは
之集其地部あるの集も多く意匠が濃さん
である。字中家家がも新考より指し出す之
と伊勢を遊べたこと偶然なるの其の歌が
よのばらなどいささか此二集の紙の意匠がたせこ
み入り又意匠もあるからである。何物もよき
匠ある紙を均分よりさうらのわらうか。尚又

いつをやあつたか示すに其之の歌切の襖物
をいさかのわらうかをいさか比較して見れば
此前二別産見しゆかつて意匠がたせこ
見ても多し赤し意匠たの意匠の左端の
下湖に聊か襖け傷があるのと一字筆意匠が
してあるのむやうと原をいさかと筆したか、
か舞ハ別産を判し意匠たの意匠と襖物た
こあら。

○甘藷の産地武州川紙迄のいさかの女生徒
の考め、あつたかゆめ芋畑の武紙かを要占めし
女生徒諸將をやらせるといふ話をもやまき、
不とこい女生の致味と投い且つた。初ま

ある名もそれと思ふ如く、関西流の「よ卯」支へは流
み大なるや大阪をこへ、毒狩葡萄葡萄狩と云ふが
こゝに、強きつゝをこ限りのかへるゝ。誰れも
其の農園へ入るゝよまわさる民を並つて、
よえらせむ其分界に、
ことよまうをわさう。そのあを敢て持つら
あゝとあゝ。聊かの便をえらむもあゝよ

○家花よちある長頸丸の複製の支那版法書
ハ複製の初めと出たぬが、えがけ子印の版
下と云ふことの初めと云へぬ。係しよん疑か
北宋版と云得刻しよのひあること、
の流ハ長頸丸の流終ハあるのひ球とすゝるゝ

版式七珍と云ふもの、
ハ比朱子の大字帖が出たぬ。此の帖が日本に
の流帖の初めと云ふもの、系本ハ柳本家
ハ係つたものと云ふものと思ふ。

○此の真贋の鑑定に、
喚くもの一法ハ、
句ハ加する。前ハ、
比強んと云ふのは、
たさいと云ふのは、
人が句で、
其
贋の見別かつき

其のある部分に糸を懸けて充分静置して白を吸
いと見ると土の白いが吸するのでもんが正品と知
る久しく土中を埋つてある日と見、充分土氣が全
まんであるからと決つた。

○今次の余が過筆に三十六人家集の紙の表裏
を正として聊、紙の表裏を正して供しること
を要するものが二三ある先づ用紙の多
く、唐紙陸奥紙厚紙海紙、焼書紙紙
唐紙蠟燭紙とあり、此等の紙を裁縫、破縫
重縫をして表裏を正し、文物を宜おしに打
出して表に凸裏に凹天をあらうとあり、妙なる
完璧のものなり。筆、字の書とて謬脱ハ

あり、紙の表裏を正し、文物を宜おしに打
出して表に凸裏に凹天をあらうとあり、妙なる
完璧のものなり。筆、字の書とて謬脱ハ
紙を継ぎ足して補字し、所あり、此集も早く
若干冊散佚して、重輯集、麻蓬法河のものと
偽のものをもて補ひ、人麻呂業平、十町の三家
集も佚して人麻呂業平の二集、いさよの断片
世上に散見するものあり、此集の公任の撰、傳り、元文
業比も生ずるとする、此集の公任の撰、傳り、元文
十八年後奈良院天皇より本朝寺法主護如
主に御下賜のものあり。

此集の表裏標本的、十枚二十枚瑞瑞故
の附するものあり、全部を瑞瑞故
の附するものあり、今方徳川義親侯

益田の男が、さういふ表をえんね、全部
 の價の三万六千圓とさういふ。瑠璃版
 の、華の紙の文、表も、紙も、
 現りの得が、これを、紙、
 の複製を、この比較、さういふ、
 の複製を、この比較、さういふ、

藤原

松本交山の圖樣(二)

萩原又仙子

これからの咄しは中井敬所翁が、余に語られたもので交山の雅趣うかふに足るものだ。
 或時交山が亡友の追善をするとして、友の菩提所で揮毫會を催した、席上要ひた印は一畫一米に換ゆといふのを特に彫せて
 幾十枚の唐畫をなし、落款にその印を捺した、來客は悉く白米を供ふことにさせた、其上讀經供養自身持出しをして懇ろに
 營まれた、其印はこれであると翁所持しあるを余に看せられた、就ては其印を捺した唐畫が、如何に歲月を経たとても何人か
 持傳てありそうなものと、翁に尋ねると翁も亦、印は斯してあれと看だことがないと残念かつて居つた。

安政の末なそうな、交山は于蘭盆を兼て、深川の平清樓に同人社中の追福のため、花供養といふ催しをした、知友は云ふ迄
 もない、有像でも無像でも誰彼を論せず、來り會することを求めた、これには來會者誰れでも金銀目錄など包み物一切を請け
 ず、施主の志ざしには花一枝を、必らず供へられんことに前々から斷り置き、そこで當席には六曲の矢襖形のものを立て列べ
 客の一花一枝を携へ來たのを紅黄紫白配合良く、矢襖に挿し、交山はその傍らで、追福の意を含む繪をかき之に酬ひた、席畫
 しまうて後は盛んなる酒醺となり、賑やかな追福會であつたといふ事だ、其の頃山城川岸の津藤香といふ酒店の主人で、親
 譲りの身代が太いものだから、豪遊をなし通人をもつて自から持すものださうで、交山が此追福會を聞き込み、時を計りて三
 四人の歌妓と幫間を引連れ、舟を平清の裏川岸につけさせ、先生の特勝を聊か賑はし申さんと颯々めかして推懸け來たを、交
 山は此清會へ無作法な振舞、氣に喰はぬと堪へきれぬ一本氣「イヤ香以さん、今日の會は遊興にいたす呑抜け騒ぎのものでは
 ない、一枝の花を佛に供へ、俱に靜かな心持に過さう會なのだ、貴所とは平常隔ない交りはいたせど、今日の眞意を酌まず、
 解語の花に酒の香を添へて、席に臨むなそは好ましくない」とケンもホロ、の拶挨に、香以は雉子の喰の如く朱を注いだ、
 傍の大勢居るのを末社の執りなしで、香以別席で興を遣つたとの事だ、交山の直なる氣性として、此一幕は彼が面目を瞭然た
 らしめて餘りありといへやう。

交山か香以に對す體度は、香以か金遣ひの荒きと、狹斜の巷に彼か噂の高さを、若藏の癖に出過ぎたものと交山は思ふて居るらしく、平清の席の外に斯いふ咄しかある、津藤香以は常に遊興する場合、懐中の貨幣はまだ人の手に觸れぬ新しいのみであつた、それを播き散すので皆目を奪はれ、一時は歌吹海上風流船頭とも持て囃され、自つと彼も高くとまり、夏の夜の事であつた、最負する寵妓へ千草色なす美事な扇を呉れたものだとすると其贅澤な小扇を右でも左でも欲かるのを、云ふか儘におのれの關係筋へ遣らではおけぬ事となつた、それから後には香以大通の席に侍らるゝ名聞外聞の表徴と目され、彼か新しき金の光に浴さるものゝやうになつた。

それを交山は見聞して、香以何事だ金の光りて賤しき者の目を眩ますとは坊チャンがお山の大将といふものだど冷笑しながら、香以のくれた小扇と畫様まで酷似したものを作らせおき、時偶、香以と同席し、お傍去らすの歌妓か持てる小扇と掏替てしまふのだ、替玉とは知らず曠れの席上、蠟燭の灯影に透かす事もあると思議や千草の中に化怪たやうな狸の影か映るので始め氣着いたものはアツと膽を潰したとやら、それか沙汰となつて貰ふた皆んなが透してみると、異様な化け狸の現はれぬは無く、遂に旦那も餘まり悪戯か酷すぎる、這な物氣味が悪いと兎裂き捨るばかりか、香以には怨みつらみをいふて泣くといふ羽目に及んだ。

香以は胸に据兼ね、交山と呑み逢ふた席で、先生、俺か遣つた扇に化狸の正體は、貴老の細工でありませう、俺が先生の目度に取りらるゝとは變なものサといふと交山は笑ひながら答へる言葉は、御察しの通り、畢竟貴所の振舞が日頃通客としては受け取難い自贊の節もあり、余等が土地の仲町には粹な客のする事でないと思ふ、通客は軽く遊ひて淡く洒落らるゝが宜しからうと交山の言分、その通りなるに遊ひ慣れた香以、大いに悔ゆる所あり、夫以來は別戀の誼みを結んだといふ事だ。

余は交山の軸物を五六點、觀得た中に、晴雨の双幅が最も珍らしいのと懐ふて、目に浸たのがある、雨の方は菅笠を被れる農夫か早苗を擔いた後姿で、脚の近くへ野薔薇を軽くあしらひ、前方田の中に屈み腰の女あり、あたり早苗を挿しかけた態美しく彩描された上へ、縦に細く銀線の雨を刷毛もて一面に引かれたものらしい、その雨がはや銀鍔を來し、鳥渡看は淡墨の

線とも疑はれるが、熟視するとチラ／＼線の光を殘せるは如何にも雨の感しか真に逼つてみゆる、銀線の雨は珍しいことではないが、全體に引いた線の錆たのが畫面に見榮があつた、晴の方は、遠景に草屋と雜樹をあしらひ、其あたまで藍色濃く大振りに筑波ヶ峰を描き、玄鳥番ひを草屋の下の方へ飛せあつて、幅の三分一あたり下部を三段ほどに、金泥を是も刷民引に横に濃い目に引いてある、金泥の燦たるるところ日光の鹽梅、頗ふる穩かな味であつた、勿論尺二位の絹本とて、金泥銀線の手際良くみられたとは云へ、自然の風色に交山か親しみての上ならでは畫面に對し、斯く充分の快感を與へられるものではない、此双幅の如きは晴色雨陰の調和、頗ふる優秀な趣きを得て居つた。(續出)

○亡友坂の五郎の記念板の出版を以て友人の爲に
此程の出版、余がねお世つたのが、例とすつ
てある、此を十行をも教へ得る出版がある。
友人の傳記は自然自分の事蹟か終んせある
から、自分の傳記の資料とすつ、今左に改刊
の此程のものを本として出すこと

鳴爪痕 新島男作

名山傳記

天下之記者

半峰昔話

田原紫紀念録

吉田史記

日本文壇の生所

胡吹英二傳

田中吉山傳

大隈第一言行

五峰詩影

熱海漫談

北城詩話

增子長一の日記



五峰遺行

田中唯一平紀念録

関係の踏査で中々稀志の材料の僅かを得た
よもやあつた、自分と交渉のあること、確かである
此外新多記載のよもや自分の住居、関するもの
ハ切符のまゝを保存してあるが大略左の如し

一 報外新聞の取復版に載せるもの
年少時代

一 新潟学校の舊校舎 新潟市

一 紙後ニ於ける政治経歴 同上

一 吉田新史在社時代の思い出 吉田

一 早稲田大学の思い出 早稲田

外ニ余の幾多の逸事、載せる所を略述、敢て少

くまの(過)の各物に挙るものあり。唯此處に
自傳の上ニ必要の資料とて漏す可らざる
左の書籍あり

- 懐存文書 凡ハ四張あり
- 本家之歴史
- 系譜
- 成海重文集
- 和久家文書
- 用益書簡
- 泰嶽簡牘
- 家廟遺墨
- 御人書簡

- 自傳志料

- 手抄遺墨 日誌

北内蔵七資料と云ふべきは手抄遺墨と日誌の概百巻に及んである。 十月甲の記

附記 自傳の田舎住歴に就て僅つた材料のありのい早大岡考彼の住歴に異つたことである。 茂田書(自家)の住歴に就ては田舎と云ふ目録ありしもの、未刊田舎刊行の業の就ては圖書刊行令の田舎とせしもの、此等の仕末書が材料と云ふ、出版部(早大)の寄りの長い住歴、印刷分社の社中としての十年の住歴、就ては何等資料が無い

此外文の場合の注意、大隈侯八十五年史稿
纂考、業七余の注意、(英)より、
ある。

十一月四日記

○此頃自分の近刊の他人の随筆を讀つてボツク讀ん
ぬ、全誌自分の纏つたものを讀むらうと隨筆を讀む
ことが好きで若い時分から多くの隨筆を讀んできた
が、今の人の隨筆も讀むのは、自分が毎年隨
筆一冊を出せることが例とあらうと見ると、どうも
他人の隨筆を讀む今時の新らしい隨筆を記さ
ない氣がある、敢て其隨筆から何等かを得たい
といふ念があるのせいらう。勿論、人から割と親し
むといふ念の毛髪あるのせいらう。さうかとらうと

自分の隨筆と優秀者の比較をしていひたいが、
どうも他人のを讀んで見ると、自分が隨筆を著
くは見あがつかす不安があるやうな氣がする。他
人の隨筆も著者の立場やその流儀の區々であ
るが、自分の氣味の著者も、流石と見ると、
ことおもしろく感ぜられる節もある。自分の多
くあるやうな、
或いは、自分の思惟にヒントを與へるやうな
もの、讀んぬる際、後進の役立ちのひも、他、自分が
く場合の史料、あることもある。隨筆
を讀味とする、よめる相互に讀むこと
大切と思ふ。

○村上香栴が歿したのち其の葬儀は歸人北人
相商の交りがあるとか云へる。北人の多き時
代より新内の今溪姓の某寺の風俗焚をやつた
こともあつた。其寺は自分の親族の真此の親戚で
あつた。忘れたる事実はある。三十年計
前より英社の振えん席上北人と今や村上
ハ私をえんどうとも人があつたと云ふ。十世と云ふ
らあつた。名は政経と云ふ。新内と云ふ。此から
へてある。モット年がたつた。ある。鼻の
疑もろい。無いかと云ふ。私を笑はせ。この初
對面は其後、名はよく接した。修善寺の邊の
所は、白隠の遺法といふ。室内体操の法を教へ

法華

（此の友人の山田一郎の法名を遺ふと云ふ。持人
北人、頼んで、山田法師と云ふ。誠と切つて箱
の北やうな法名を得た。某寺の校の住持も
北人、頼んで、その方を入れた。こともあつた。成田の新勝
寺の圓考、波瀾跋扈、憶ん共、漢説をしたこ
ともある。私が大志と云つて、後、領食と云ふ
新美、あつた。初め、北人の名、若、佛教大徳
論を著して、其の著して、北人、思ひ出す。此
北書の房の本、龍寺から破門を受けた。此
近年、本龍寺法主、克演の年、清に係る。此の者が
坊で、現は、北人の、自分、を、破門
を行つても、法主、愛護、北形、蹟が、あつた。

書物を現るん先達の印記もあるを以て、何の書物の
の概を賜うたいと思つておのづから、遂に其概を湯す
永訣とすなり也。

○月日の日中行き、とて時日をも必きう二返せ三
度も、帝を持ちて庭園に出で掃除をすることか
例とするをみる、婢僕が為す(べき)ことを自ら敢て
するの、運動の如きである。此頃の落葉の香を
節心交り拂うる女とて、葉が落るの、之んを
掃るに相当時間か、聊か款に汗するまじ
らざることもあつて、みづから潮けを莫かけぬことを
するに帝を役することもあるが、保し更なる考
へて見ると、月日の日中行きとて、果して四の
葉の類に依りて、さうであるを、樹木もある。寸尺の
地も有せざる多分、掃るんとて、落葉の無いこと
と思ひ利くと、月日の然然とて、光る所へ、落
葉を掃るに煩、寧ろ多分の美やも所を、之んを
歎するも、いかに體をいこと、寧ろ度々入きて
ありと。

○月日の日中行き、とて時日をも必きう二返せ三
度も、帝を持ちて庭園に出で掃除をすることか
例とするをみる、婢僕が為す(べき)ことを自ら敢て
するの、運動の如きである。此頃の落葉の香を
節心交り拂うる女とて、葉が落るの、之んを
掃るに相当時間か、聊か款に汗するまじ
らざることもあつて、みづから潮けを莫かけぬことを
するに帝を役することもあるが、保し更なる考
へて見ると、月日の日中行きとて、果して四の
葉の類に依りて、さうであるを、樹木もある。寸尺の
地も有せざる多分、掃るんとて、落葉の無いこと
と思ひ利くと、月日の然然とて、光る所へ、落
葉を掃るに煩、寧ろ多分の美やも所を、之んを
歎するも、いかに體をいこと、寧ろ度々入きて
ありと。

てん丈に毎食つてけり飽きること知らずい
く折るる塩辛むむ一油割と合へつてけん飽
きては舞ふのに粘るよの長くつてく氣味
もあるやうに。全体心土味といふよる聯想も
干渉ふのであらうが、尾角うまう感する。自
分のちのちの煎餅の薄さといつてつて甘くつて
もうまい。此頃か思ひも言ふよるをこの人から
送つて来た。先ハ一寸程の小海を散非である。東
南もあつた。皆海味から漁つたよる。長
つを喰ひてくひのよるか肉か空疎でうまうつて
里の小海から漁つたよる。長く肉か豊か
いろくの油地をやつて合へるよる。飽きさるる

海味

い。こんどよの田舎もある時の物菜とて珍らしく
も無く式才斗忘んでおれがよるも氣か付いてこん
どよを送つてくんと思ふれ。いざあからあつた
ん程々の物を寄附す。此の小海を合へる初め
てである。えんとうまう感するの味のおよ送つた
人の思ひつたや好まぬが味を
海味の
添くとも
このよあつた。

○先境にむむと食物の減すこともあるのよる。むむ
か自分の如く酒を嗜むよるもむむと合の減する
のを悲観する。併しえんとうまうも若い青年のこ
とを想ひ別つて、あるときはこの時いらぬの感（追
懐を禁し得るよる）こともある。今のことき教養の

知らざる書生時代僅かばかりの錢を懐らうと常布
速走を試みれば時をいはずに着くと是も七夜九
腹も減つてたまらうとある不景氣なる冬を
こ駆け込み飯を借使して主とこころに五六杯
の飯を平け一行三四の友達の大名に見るく大ま
な米櫃を空しくしこころを思ふと真に痛快
であるが空車城塞の便利がある今の世の中は個
々の腹を減らすこともあつたから貧書生でも受け
ばこの快は経路が無らう。自分も老いて今はいか
かしの夢を辿るのみである。

○若し一年の或る時節に遊山といふを試みれば或
は家族曰士或は友人曰志む格別月日景氣のよ

い所でもさういふ井南持むいかけたよめは五六
尺七の歩して目的地に達し山をくぐると遊
て法をうん砂にまじして何んか教習のさうとこ
み行厨を開いて飲食することか何より七興味
あること、こゝに随分家々在るが教習のさう
時家々の時、おんをわつて、こゝと片の長、こ
と申す、寒氣の病を陣を張つて困らせれこと
もあつた。私をといふ車に乗る家も定めた後七
此の習俗が脱け切らず毎年或る期節に一家を
奉りて井南持む近郊に出かけたことか幾回か
ある。の鬼子母神境内に焼鳥を食へる
茶屋があつて、さうく行つたことか、目星

一向を歩かひも行つたこともあつた大森を遊んでい
もある。一家団圓まで斯やうなことをするのの樂し
いものだが、元々今、西洋の属は、郊外遊の場合に
成るべく多額のお金もろく、離れてある家族を
驅り催しよるものが、今の世と家族が減つて毎年
除ちるもの並べの賑の数の少さのいふことと
を感ずる。

○活動映畫が流行してから活動映畫を役め
弁士の大切のものとすつて、女の弁士の説的の巧拙
か人を引きつける大なる關係を有するやうな
隨つて弁士七おあの収入を恃する職業となつた
か世の三日月の娘の映畫とあつて、人物が

流るるものが、面白く、伴ふてや、いふ所、所謂ト
キーといふのが行つて、出ると、弁士の不用のものとさ
九つ、又、又奏樂も昔の音の、意用の、尚、使
か行の初め、その方面の、生計、は、
つ、あつた、此、今、目前、見、入、する、所、は、
走馬虎である。あのトキーハ日本、
沃くとも、あの、もの、は、
ある、もの、も、一向、に、
トキー、
没、
英、
トキー

か采し得らるる^け思ひ無^い、又法活弁を^けつぬる^い
映畫の衰へる^いおち^いる^いと思ふ。

○裸体畫や儼が今盛んな市中でもさらさら
誰ん七時のやうな議するものか無^いやうな^い此
國を為^すき^たて^るの藝術もあ^るから^いの^いだ
いくら局部^を描^くか異^なる^い裸体も性慾を^そ
了目的^に無^いかエロテック^な無^い。却つて局部^を
手と帶^て格^を多^く或^は布帛^で格^を多^くする^いよ
實感を呼^ぶぶ^いよ^いがある。此點^に對^して日本の浮
世繪の所謂^るアブナ繪^をに全裸^なう^い迄^かん
エロテック^なである。アブナ繪の青^き振^りに決^し
局部^をを露^ししたの^い無^い。富^貴肌^のあ^る部

繪

かを露^して^いる^いき^いの^いち^い問^の裸体入浴
の圖^も多い^いか^いの^い大^体に衣類^をの^い着^けて
あ^るの^いか^いせん^い切^りて淫^ら衰^の氣^をを^そ
の^い何^れか^いと云^ふと、企^圖の春^畫である^いか
ら^いである。此^は市中^にあ^る美人^男の^い肩^を棄^て
て大^井河^を流^す圖^もい^い或^は肌^の露^れん^いと
い^いる^い美人^のも^い脚^の一^部分^を露^して^いる^い
淫^ら衰^の實^感を^そ起^すやう^な出^来て^いる^い
の^い美人^が好^む男子^の首^をし^て局^部を^すく^い
て^いも^いあ^るの^い如^くに密^着して^いる^い日^畏怖^い
の^い托^{して}男^の頸^をあ^るり^着て^いる^いと
あ^る脚^の伸^縮伸^縮の^いケ^ダシ^{から}白^肌を^露れ^い

男の眼前におくをいけてある。男の支体は中よりよく
 大きくあるといふ。構園はどう見ても美威をそ
 ぞく執がある。吾を祝儀は全体と見る標準にて
 凡俗をえ帰るてあるの比らうか。設令に裸体で
 ころころも深威をい美威をそするやうなことを
 帰るべきにあらまのいのか。此国の北きの場へい入
 次の回らうとも遠かる工テツクむらめ上言があ
 る。
 〇不景氣も大業、繁物、減俵めりも七十年い
 世の中にある。いくら俵約が良いことでも官吏の俵
 給を減するをいといんまよのいあらうか。今世のや
 る十夜盤、母から割り出すといふところ、利益の増

減るると減俵も理窟のまの詳にあらうか。官吏
 をとると同扱を見この千ト妙助が書道つておの
 やうに思くる。實に最に危険な琴弓線三筋
 のつねから、これをと大膽不敵の試みはる人
 のである。果あつて引、司法制から極刑を不
 平の起り終に各者に進まると没及下りてい
 んの政府もいあらうと也い止まると。司法官進吏は
 行政官に較べると俵給も高くと物おの収入も
 多い。昔のせうま踏然芭蕉で内々収獲が
 あることはい今司法官も無く、何んかともう、行政
 官のあり、今もあつて。日長す給料は司法官
 を強くとん世うめめめめ所、更と減俵

と来ると然しておんらひの甚である。私に下りたの
此の清勝なるは、校友の多きおの勢におも
長を以てのみある人。今此の私に此の勢と
の校友を云ふは、君等が反抗の本年に出たの偽
々司直の廣徳を標榜し、此の勢とあると其人も
欲いたが、實は司法官の人並の交際が出来ない
境遇で(司法)ある。是を氣の毒と思ひ、司法
官が外界の人と交へるの司直に實はあり其の公
平を破る目をもいふが、是は偽徳を兼疏する
況井が司法官世間交際をしない為のよは
又此のありて困ることとを居く、故にこうも
○亦今のやうに不利な事あるは、此の勢と

は画家うしろ斗米の窮する故に、此の勢と
とを交際し、此の勢と交際し、此の勢と交
此の勢と交際し、此の勢と交際し、此の勢と交
と頼んて来り、此の勢と交際し、此の勢と交
況のあり、自分の切る志あり、此の勢と交
成るといふから、その言の任かすと、此の勢と交
来り、此の勢と交際し、此の勢と交際し、此の勢と交
の、此の勢と交際し、此の勢と交際し、此の勢と交
家の内戦、此の勢と交際し、此の勢と交際し、此の勢と交
湖いてあるが、斯ういふ、此の勢と交際し、此の勢と交
とい悲慘であると感じ。○三十枚前の今、此の勢と交
○三十枚前の今、此の勢と交

漸んじゆつと来紐育の豪商の模倣を修つて中々十
 幾層もあつた新築家に入居する工士の井一といふ急
 行もあると云ふのはかまうな申座に存してゐる。また其
 るは其の間に申座も治きこゝに居る人もあつた。其
 築城の下の住してゐる人の境遇を語るの事あつた
 が今、東京の市中にも其を眼の如く感ずるやう
 なるものも築城の下の住する倉庫に居るものも用い
 るが、其の如く知らぬもの、道々賣座もあつた。更
 ん進んじゆつと申座や其の如く其の如く其の如く
 師をえんじゆつと申座の如く其の如く其の如く
 三階もあつた。寝んじゆつと申座の如く其の如く其の如く
 果して其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く

三階

(きとの如くの如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 多く其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 るものと其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 せんじゆつと申座の如く其の如く其の如く其の如く
 つくり紐育の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 無送悲の如く其の如く其の如く其の如く其の如く
 感ずるものも其の如く其の如く其の如く其の如く

十一月四日の録

〇一ツ橋時代の市大の同窓が昔生時代は因んで其の
 田舎の三河屋には肉屋合をひきよめるのが例と云うて今
 日は自分と石浜(あつ)が南着幹事と云うてゐる。
 自分も本年七十になるから同窓も多くは七十年
 輩のものが多い。振り返つて見んばの晩と故人とあ

つとよも少くも。お慶らす今毎に十八位に集ま
が生存者二十枚名もあるであらう、こんからい進
生存者も謝すしあらうと思ふと、今方の今もい
故人を追悼する執向が一合を催してと思ふお
る格別込み入つた執向をすも及ぶまいが故
人を追憶する漫話今も七開い知らと思ふ、
も尚ほ多んを端緒として時々申合を別し時を
定めて生存の定めの産物合を催し各自の経歴
を語らざるを著記して同定録を出版し
て見たいと思つてゐる。あの骨の折れもお
もいらしいか出来るかお申す。
○故郷を思ふこと、人の産物であることが表境に

表境

入ると殊々其地の切なるものがある。實に故郷は
つと興味のあるところ、荒れゆく時の友や友人と遇
つて語り合ふことが、先境に入つては友達
や親戚の折りの親族故郷も枕を地下に入
て、昔一と語り合ふ相手は或人と無いつた。
故郷をゆく者一の出来は先と比譯もあるが、多
くして七師方を交すの、郷土の郷味を口にする
のも楽しい。友人の子や孫や親族の子弟に接するの
も真がある。昔一各染の粗地屋に一列するもの
も愉快だ、そして何となくも懐かしい、
山や河や村や畑や村や宮や寺をめぐらる。地帯
こそ依然として存在してはる。追憶の

念をとり、其の山を草狩をし、其の川を
遊ぼうとす。其の村を遊覧し、其の
某の寺を、村を遊覧し、其の
頭を深んじ、其の中を、
おののけ、此の山に依りて、
其の寺の考しを知りて、
母祖を知らず、其の
生ん、其の考の先代を、
生ん、其の考の先代を、
心深い意味がある。

○今次の余の逸筆の癖は、自分の心素を
富に印を捺し、
境

一に中に、寛然、自放、任然、不、
浪、
刻を、
喜に、
杖、
日、
流、

杖 白馬山 二款
日 流

五月漫筆





東京の真中に
これは變つた標識

東京の真中、高層ビルが立ち上り、人眼をひいてゐるが、歴史ある
歴歸りのモガ、モボにもトキー以上のわからなさである。これは映画館
日本郵政の工車場、働く朝鮮人土工にのみ通用の「左側通行」

坎倉印集



寬然自放

任運不西羈

詞場放浪



○郷土の人や家や草木ハいくと懐かしみがあるも七代謝
を美かぬ、河をせむ七変化が無いとも云ふるの先づ亦
久性を持つてゐる。●山とありていつかむ七変化が
無く、平等の祖先が頼り詠めれ山がその伏の
山である。その山は丸くも一七名山ひらき、敢て風は柔し
高んぢゐるいし七家山より風光絶佳の名山以上の懐
かしのあるの、平等の祖先以来代々を知つてお
つゝの北の大日自然の塊物の外は何物も無いか
らである。歴史は断絶することがあつても、此の山
のみは連続的の歴史を知つてゐる。唯此點を
しして何れ語らうか、そのことである。よく云ふこと
だが、人の印象を論ずるに家山は最も一七面目が

歴史

あるとか、面目が無いといふのは、あるも無いも
である。適分人の成りたる失敗しつゝさきまぐらひある
が、郷人に別て褒めかきつけらるゝしゝといふと云ふて
七、成功の人や善行の人、家山に對しておのづから
自負の心が湧き、失敗の人や悪行の人、患中心
家山に對して担恨たせざるを得ぬ。已か家史
や郷土史に汚跡を残したるは、断絶するも歴史
史を知つてゐる家山に對して、痛切に辱しめを
受へる。死から地下へ入つて祖先から叱責を受け
るやうな感がある。●家山の一特徴は、山に
對して儀礼を重んじてゐることである。まぐらひの時
とあつて、儀礼するも七七故である。まぐらひの時の時

痛

此家山欣然我んを迎ふと云ひおけぬも、根柢一に
欣然家山と仰へらるゝ人がいふやあらうか。錦を衣
て故郷にゆつても、道なき女ことをして産をばう高
岸より附いたやうなものを家山ハ何故に悦
び迎へてあたらうか、人ハ此が都人び跡手、家山
を北の山に脱走し、家山を忘れてゆへぬよも、
都人びよのふらと云ふてゆへぬも、えん寺輕
舟の行動を見て家山ハ恐ろしく苦笑するであらう。
殊に近年のこと故郷は懐かす、無間天輪、家
山を振り棄て、都人び集まるよを見て家山ハ
何と感へてあるであらうか、嗚呼、家郷の山を
寺の僧者もわんが感の文を湧くと禁し得る。

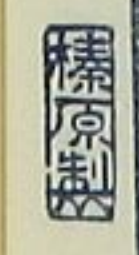
深草

○前記に旅のりくくの思出を書いたが、新時旅行の一
を満ちた、實の自分の経験、此の二程の旅行を考
くるとのこと、無いか、略した。近年、新時旅行
にひとく重きを置き、家を心を一つ、あとして
大切か、んこののよい事、自分さ、新時、あ、相想
へて旅のり、山来す、時、きて、真似、このやうなよ
そや、んが、い、味のよ、い、い、併し、新時旅行
よ、よ、重きを置き、新時旅行を、開、て、い、
取、と思、い、新時旅行といふ、語、を、さ、さ、い、ん、が、
帰、の、相、想、を、旅、の、と、す、る、こ、と、が、あ、る、此、の、旅、の、
人、向、の、あ、ら、い、き、を、大、抵、あ、る、苦、楽、を、共、に、

同士の旅行は、死生の旅路の前提のやうなものである。九八得うくの旅は彼人の支曲同士の旅である。前途望望に満ちた新婚の旅とい趣が異なれば、後者も亦おのつから情味の味々たるよがある。新婚の旅も将来を語り、旧好の旅も改修を語る。かきか後者の前途が推し詰るを難澁な感か無い。どちもが共に努力して家庭を築き上げれば、改修を運轉し、自から慰むことの無いものである。東洋の或の銀婚或の金婚をいふ人多くの人を招き、自祝の会を聞き聞くと流の地がさるゝ。此人の為す業は、いこととて、衝氣が私をいふ。欲しき。寧ろ先夫婦が氣休の旅とする方が

自祝の道もさるゝ情味の却つて此方此道のやうな思ふ。

○老翁祝ひすゝの形式：階下だがうよむ情味のあるよむ無んへ祝ひも嬉しくまゝよむある。自分もさるゝ事と考へて、先考の還暦の時、祝言を催したことがある。實に還暦の祝言は他人がすべきよむを知らぬか、其頃の私一家の境遇は、さるゝことと望みを得るゝつと。自分が父の考の祝ひといと思ひぬ理由もあつた。才一さんと核入り父の妹や弟を東京に。このも父、母、弟の同胞のさるゝ又妹、弟、叔父、母のさるゝ慰安さるゝことと、思ひ、亦自分とてハ長い百廿五、奔走し、久しく父母の膝もと



情味のあ
る金言

離れ華福にかつて入獄の身とすう十かゝる心配を
父母にかけはから、是等の祝を拭きして謝恩の志を
當りといと思つた。上命の極度其志を今場所にて
紙綴り親族や平越の家族中の家族奉けて十
七八人他人交へずの合をひくも、席上自分先考
を壽する事祝中、父母を如く教父母を煩じし
此の御いふ事、親族を誹へ、親族連中
大いなる人、自分思ひ、
を脱し祝言であらうと思ひ出すが
くん。

○自分、初の大政、赴あき迄分長い滞在を以て



もあつたから大政、珍しくも思ひ、先映元家を付
あを吐けは、時ハ、あまの浪着の地を、
の比から、方々市中を見物した。目についたのは、橋の
の多く、架け換へてゐること。政と出来上りの
七、今、中、中の見受け、概して、
見れば、さへ見ると、関東の地、
と對する、準、傍行者と、
志を用ひ、
横に、
其の必要の災難として、
ハ命の、

の秋日無んてあつた飲食店をいふプロレタリアや橋本の
と極まるものもある。中々ブルジョアが入つても不足の
もの所もあるが何れも七や八の者の境況は東木概純
縄のれんとするも其店を出してあつたものも自身があ
る。土間の外は僅か家族のみを部屋が一ツあつ
て、まゝかみ出しするものも何れも在るもの
見へる。まゝ集あつてもプロ階級だから、まゝに這入
るといふ階級の状況があらはれる。斯ういふ
飲食共口をまゝあつたものから、縄のれん
行脚をやつて、まゝとあつた文人もある。身をプロレ
リヤの境況、まゝ梅前一杯を飲け、衣の支のや
り、おれを相対する、まゝの味のあるもの。酒

好いのも酒場へ足がたつたが、汁粉屋に這入つて見
ると全く別天地の思がある。まゝ入つて来たものは
多く、婦人ばかりと、まゝ男子も交つてあつた。場の
の空氣は陰鬱むくむく酒場のことも、活氣はまゝ唯
れ、まゝと甘い汁を啜つてゐる。如何にも静寂
なまゝとあつた。まゝ入つて来た男性も優柔ま
やく、まゝの酒場とまゝと全く反対の、呐喊も
あつた。激論もある。あつた。静寂もあつた。放歌もあ
つた。亂暴もある。平角をかきまゝ何とまゝ不安
の空氣が漲つてあつた。下戸なまゝあつた。自分か汁粉

室を飛ひ入ると見ると斯うな境地が違ふよふと思
ふ程であるが他のを等の一層不足を踏み入ると
いろいろの境地を踏んぱら、更しく異状の感も起
すよふが女とすると想像もさうい。日本橋の元の魚河
岸の川に遊覧船局がある、是れも繩の式で土間
の公車が走るがあるが、川を望む所の望望の姿に
ある所へ坐すと、東京の岸下は汚い濁り
の川に花船や種々の船が又く、如何にも不浄な
男を度々や北高のちいれ日本橋の園といふ九のきり
異つてあるが、河中に船生活をやつてあるよふが、い
ち停つてある。一家族の船を家とてあるのだから、
夫の力も火もある。蒲団や襦袢が干々えとある

舟を渡る女が、大根や菜を樽に漬け
舟に載せしむるの形、船生活の状もさういふと見へて、
これ一種ブルジョアの知り難い天地だと感ぜられた
七、其者と這入る毎に特々川に面して、陣と取つ
て、此別天地を味ふことと感ぜられたる。
○神楽坂の杉馬場といふ代座の大きな店が内部
の赤澤がつらういと見へて、あふまむと見れば、
貸し此よふと見つて、取つて、表紙を心して、
の書物の持主の、此つた、うつた、大切な書物を一
初と星もあんな店を置いて、さういふと、教訓を
得て、自分の知のしめるだけ、七、八、九、二件ある、
自分の知らぬいことが、まじり外にもあるかも知ぬ

て新のまを齋らしし翌朝とうやらの都合じ汽船
に直江津ら行くこととさう、直江津に着し
えると二個の行李の目失をみるのを驚えし
教のういれんる、甚重に掛合つて出せ来まい余
中、甲改上現、自合が認めれば譯れから積合
あつた相違さ。恐らく内容を吉物とい思はず
衣類ばかりとさうに、よか盗み取つたのむもあ
らうか、行李を投て矢印を、はらうか、私母と
して、市價の衣裳以上のものある、二冊の書お
もつて、幾千円もの難いものもある、他の版本
も惜あへきよかあつたが、さういふ角も、
天地の、惟一ツの原書、まを長いる氣なむけ



て、漸やく取り出し、一詩一文も後白皇もさう盗
み去られたことを思ふと、今むも残念なむ、
昔もさういふものを手鞆に入れて、さうけ
ハ、火厄を免ぐんたが、さういふと後悔し、
既におそかつた。汽船会社、相違ぬといふと、賤
賃金を出し、はげんをさういふ、さういふ。
斯ういふ他人の、手さういふ、及故、ゆ、
じめ、取つて貴重、此上の、さういふ、
よ、よ、勤、と、油、
ス、

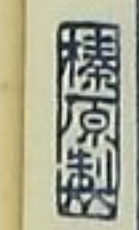
○子と勢のた、
紀物、
嘉永四年

此書に新字假名の習字あり前田の序に
 あり其書は平春堂の版なり古墨然古銅墨を
 模刻してぬめりたる也此書七種本を本の沿革
 に供す可らざるものなり此頃の漢語の復本を
 陳列するも元へは、恐らく而初稿を是し其復本を
 の一とせん、偽ふる事、この頃の古銅墨三耳、古墨の古名
 を模する、八十回の子程を重ぬりたるといふ、其の
 柄に揚子、趣あり、細身も吹き出し、其縁の
 錆は、く、握らん、他、古銅墨の隈あり、古漢古
 鏡も、く、写さん、あり、其、時、も、く、柄の極とも、
 云、い、れ、い、の、か、あ、ら、う、保、し、今、日、の、十、種、本、四、中、祝、美
 の、復、本、も、く、比、て、ん、い、お、一、毛、あ、ら、か、思、い、く、試、ま、



同一書(口時、別本)二毛(を)報つて、其、照、す、る、事、
 彼、人、異、な、る、所、が、多、く、何、れ、を、可、と、し、何、れ、を、非、と、す
 べきや、其、感、不、一、即、ち、あ、り、恐、く、く、当、時、の、復、本、を、
 大体、似、た、可、き、と、し、此、下、の、い、ふ、事、も、い、か、今、日、の、四、中、
 祝、美、の、復、本、を、執、つ、て、亦、ち、に、較、べ、る、事、寂、の、こ、と、も、
 何、れ、も、く、切、り、竹、溜、り、を、七、織、五、毛、七、其、置、を、き、所、を、異
 せ、る、近、に、柄、を、見、し、あ、り、と、比、す、ん、が、復、本、に、
 八十回の子程も、既、に、な、る、こ、と、書、く、事、も、異、し、て、粗、笨、を、
 免、か、ん、事、所、な、り、言、ふ、其、他、復、本、を、使、法、を、欠
 け、~~時、~~、~~持、~~、~~高、~~、~~時、~~、~~の、~~、~~復、~~、~~本、~~、~~の、~~、~~よ、り、~~、~~と、~~、~~い、~~、~~は、~~、~~今、~~、~~の、~~、~~と、~~、~~如、~~
 陽、の、あ、り、も、く、し、お、ろ、き、も、偶、々、一、本、を、猶、ふ、て、不
 感、を、志、す、事、
 十月十六日記

の近年漸く進んじ令心を免へることに目録の作製は
 七五倍の世の中にあつたから目録の作製をさうの怪しむ
 ほど多きが目録をさうさうとあつて、一時の目録は五つ
 ようばつていゝるい保存して置はれ他日後に五つよあが
 少くともある。高貴の表行する者も務の目録をさう
 時價が着いてあるから、他の目録をさうとするよは書
 畫の畫と目録の者画其物が字に收めてあるから
 圖説と見るの巻考ともさう考者を知り考め
 る考考ともさう。此の十数年、貴族高貴家の書畫
 の畫と感えむ類の貴同をさう此目録が深山の
 である。従前大高の目録考の家によさうに相見え
 出果す、いんさうよあつたか想像もつらうか、これ



がどしく目録に載つて出るやうなうつに。全体目録は
 のはフアリにミミのあつた進んじ目録の依り方
 ありて右籍の目録をさう此が本家のあつた書
 畫の目録をさう行いん出られ、書籍
 考の目録に二三葉の標をさう收める位
 考の。高貴の目録。書買の役と供する一時のよあ
 さまの目録。さうさうしてゆいさうの役主をさう
 七特種の研究の爲め此つれよあ、大切であること
 緊要を要する。近年、各種の陳列がある毎に
 多く目録を考へてさうさうに目録があるが、
 さいさうさうさうの目録考の解、さうさうさう
 解とさうさうさうの目録考と合類もさうさうさう

録の斯くあるてこそ使えをさすのむある。いくら稀
敷のよもを展覧に供しては目録が添いさすのむ
に書物之眼の陳列の甲斐なしのむあるが目
録を心すこといふ倒ひもあつた少あり用ひか、若
めるといふ存眼とせんが、寧ろこの書をも南苑とす
るやうにさすべし。物の陳列をしむいひも特殊の研
究九家が其の蒐集集の材料、目録を公刊し
自家の私的の蒐集集の書目目録を公刊し
り地方の郷土史料、寺の宗廟書物の目録
或は四寶の目録、圖書館の共蔵書の目録或は
部分的に古法本の目録、複製本の目録、徳政書目
禁書書目、未刊書目、焚失書目、等々研究

家の書家達が思ひく目録編纂の意を用ひ
こやうにさすて来た。故長本の目録をいふに昔し既
に出来しある、今も由緒を作つてあるものもある。書
春書物やふふ拾の目録とて其書の好まざる
心してあるが公刊さすものもある。近頃
ハの流の初期の書物目録と興味をわく人が可
り多くあつて蒐集集と目的の異なる目録を心して
ある人もある。時代別に目録を心することもある
目録を心する。さういふ京都の書家が書物の目
録を心して自ら目録を心する。未だか、さういふ
書物の目録を心する。あるのむ、自らの
心して毎月書物目録を心する。冬程、目録を心する。

い。自今の日経を對して一種の現象をあらわすから
概ね保蔵して置るべきが、實に多量な増減を遂げざるの
よも少くもする。是れも七十冊位の存するに
あらう。私に一般の人が日経を對する理解をわづら
黄んといひ、ましても多量を保蔵し且つ後を
ふやう心かけを致しといふ。

十月七日記

○銀座や上野の大きな百貨店も米を儲けるに
る其の存心も今の如くは足敷く大抵名の儲け
や織あの上をあるかせるやうな事だ。私に之を
毎にいろいろのことと思ひ出さざるは、不足
の河魁のどころ西洋を運來むも其の間敷を病
此より無論一時の不足を置いとふは、日

實を長く八百
代貨者市街
の延長と云
つゝもよ
と見る後
心構は
すゝめ

萬といふ人の出入の不足を預ること、出来ぬ相法が
よかあり、田畑を貸すこと、既に既に例が多
く、自分も少しも死なぬ其の混雑も出合つてゐる。
松別大衆の出入し、今も不足を蒙るは、
ある。○茶屋や団の改修も、不足の起
るが、もうかう方法が無い。大衆も、
不足を蒙る。○百貨店
が、打算的、考へ、下駄や足踏、
下駄も大衆の願を、入る、
おもしろい。不足の起る、
入付者を制限すること、
行した、
靴と下駄、
下駄

か、建築物を汚損するものとの差があるが、
か、成るほど鏡の如く磨きよくする大理石の
階を下駄の履き出しの勿体ない気がしるひも
履き出しの換る城段の石を運送せしむるの
くか、氣も然るものか、まゝの長い間西洋
二重入の履物か、さうする業の靴は、
か、口下の履物か、さうする業の靴は、
始めに出うけに人が主流な花履を靴に
くのを元と改つた例がある、身持子に
のひも靴の踏む花履には布圍をあけて
の例もある。今作外國のものと云く、
か、踏みぬす履物を器の上へて、今も飾り

和蘭

と不測

さやうの家が、さうあるが、
靴も、
脱ぎ、
理石の廊下も靴は、
許さう、
どの社、
か、
履き、
恐らく木履か、

靴

こちから植木溜と唱へる空地のあつたのは皆火災の
跡難を焼くたひである。三町の往差のまゝ大なる
屋敷を有し、やうに堅る度うの地を包有した。昔
通り家のやうな家と家後庭庭があつた。其頃の
家を建てる空地として所有した土地は少くもさう
つた。土一升金一升と云ふのは江戸時代の如きよ
かあつた。勿論家原の入府以来に都の人口の増加の年
も逐つて盛んたるがあつた。通り道も伴ふて海や
泥を埋めた面積も随分大なることがあつた。今日
東京の市街とさういふ多きものの中のものであ
つたことか地固が再証據をたぬ。江戸時代の人口
が稠密とさういふ、右の治見の土、親しむべきも

江戸

劇か身つたのが、今の土地が新に生れたこといさく人
口の多非常の速度で増加するから土地の乏を扶陸
を先は屋上屋を築き、四層六層の空に任して
土と全く縁切れとさうして未だみる。大震災の教訓
を得て道幅を廣めたり公園を作つたりしてあるの
は後構ひもあるが、都人等も存する土地の乏を
ある。若し他日非常の火災が起つたとき、今の復興
計畫の規模で、果して難を先かれ得らうか。三萬坪
の被服廠跡すら火に包まれない跡地こそさう
つた。上野公園位を祝換のよか跡地として役立つ
た。白洗神宮の内外苑位は相前後三つの界がある
が、祝換の公園を起したときも恐らく、大震災の物

合子被服廠品の二舞を演ずる。此の如く考へて見れば地心細いものがある。地震を知らざる國といはれは土地の狭くともよいかも知らぬ。土に親しむものも手抱か出来ぬかも知れぬが日本、事情が異つてゐる土地に親しむことがやがて此大禍を免れぬ。昔はさきの地が久此意味はたして西洋に模倣して人衆はさるゝ如く、しく云ふ人口の補給を即度する工夫が無らば、或る。同時日大なる空地を幾箇所も備へるゝ如く、或る。此區を定めて絶対の家屋其他の建造を許さざる。或る。ことなすけんが帝都都の不安に利益除き得る。或る。事田舎の人何故親しむある土地を離るゝ土をさる。都門の来り、危地を身を置かざることをすゝめる。此の都門

ハ土をき終る地と云ふや。

○昔の江戸の土地が多々川あり、昔は萩加村を以て白晝に擄りし事あり、狸を以て改題した。本所の名物と云はんとある。おいらは「堀」といふハ地名死か、或る狸目から生んた名か、人の所持するものを狸が嗜まると置いとつけと盗み取るのハ地名が生れた。今ハ此本所地名が改題の交へ用ゐると、因付を委棄することをおいらさるゝ」と唱へ、是れが地名であることハ早も忘らんてある。此の趣か、或る。全体此の堀の本所のことハ、あるか、今の香しくハ、或る。此の犬零の時に捲鼻の刺を演じて被服廠品、昔ハお世帯と云はれた、或る。此の趣を

圍んがむる堀りがまんであると云つてみる。あのまに
今でも葦葎が生へて釣ると云つてゐることもあ
る。昔は折角捕つた魚を魚獲日としてやらぬに
あつた。

○右の置いた堀の所在を考へるとは久田揮雲の越
灰と踏みつけを復んがえさし、端々を長上物の
倉倉が、この地の記述の如く觸れた。赤穂浪士
の義兵が居時江中河の河判と云つて、江中河の
かたもと堀りんにか。その倉倉端に住することす
面ふもその心地がして一時は其倉倉端に誰のま
手か無つたと云つてゐる。その不浄地として思
ふのと云つてゐる。江戸見の氣念は不快に思へん

揮雲

のてあつた。揮雲の記述に左の如くである。

四殺故のあり東方、電車道とある所にて目も挟
まると云ふ所、その地域が即ち赤穂浪士の討
入つた吉良屋敷の地である。あの事件以後吉良
屋敷の地は不浄地と評して久しく置かれ、千七
世の千七つふかつた。後年そこへ人が住むやう
にもつて七、吉良屋敷の地であることもあつた
秘め合ふは、その地である。上野橋多といつた南
年の尾崎橋多といつた、河瀬橋多
といふまに改めると、尾崎の輪、河瀬の
如く規則的な矩形の地、且つと境
線を出入踏線としての原形をあらわす

人のあつても中産階級として其の階級に導きつゝ
 あることを深慮すべき人の無いやうに其の先
 途が迫りつゝあるべし。其の計も出来ず事業
 ともせず其の計も無いと云ふ其の計も無いと云ふ
 ことも自然の成りゆきなりや其の計も無いと云ふ
 ことも比喩的な比喩なり其の計も無いと云ふ
 多くの資本を任せる大企業に其の計も無いと云ふ
 税金が何萬の中産階級に其の計も無いと云ふ
 其の計も無いと云ふ税金を徴収するやうなる
 つて其の計も無いと云ふ税金を徴収するの税の取り
 扱ひありしを之を改め其の計も無いと云ふ税金を
 徴収するの計も無いと云ふ

池田

漫 漫 家 談

(四)

ありや何者だ

誤まれた僥倖

傲然たる安達さんが
殊勝らしい安達さんへ

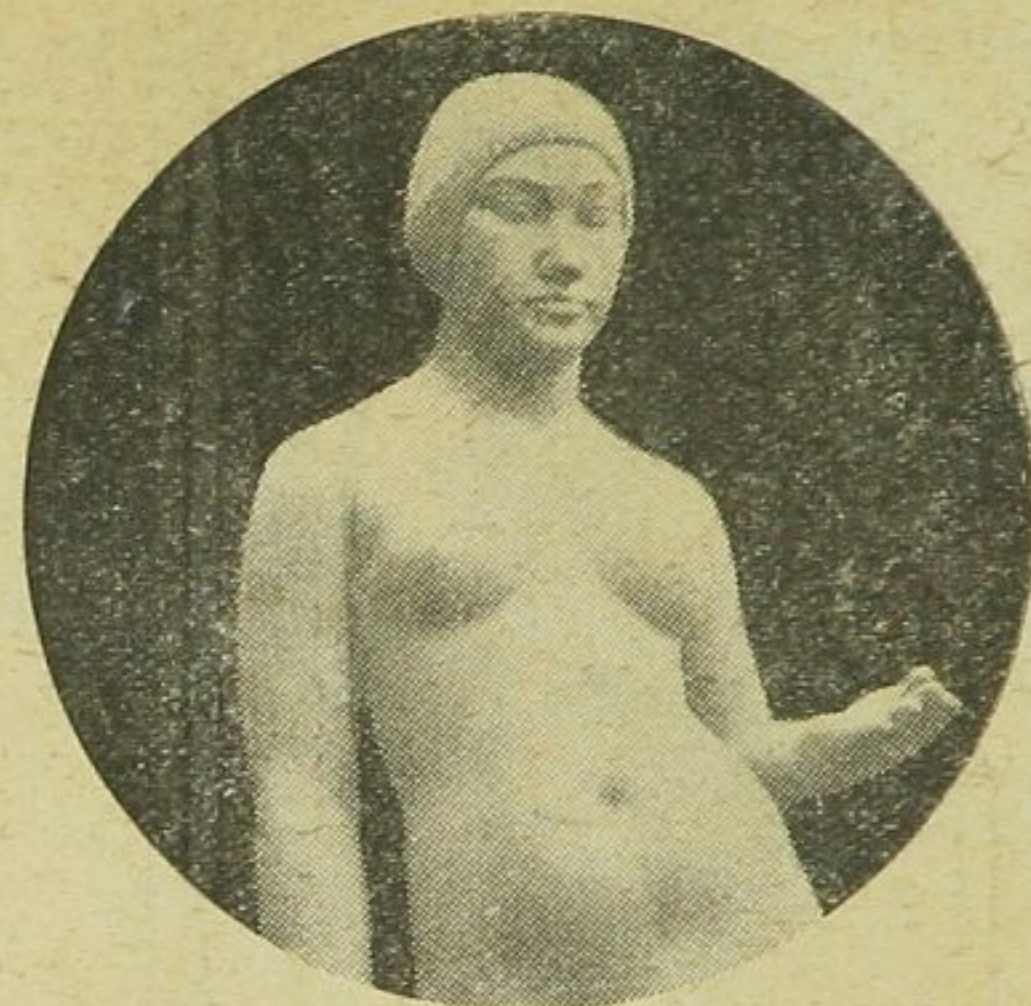
クルクル廻つて今の内相安達閣下
 閣下の所へ行つた同邸は其日ゴタ
 くして居た何かあるのかしらと
 思ひつゝ
 僕が...
 と名刺を通すと心よく秘書が
 さアどうぞこちらへ、こちらへ
 重ね返事で案内して呉れる。
 ○流石は 選擧の戦線だ
 けあるわいないないないないないな
 心しながら應接間へ通る。すると
 〇閣下の 一瞥一動を盡
 き始めた。所が閣下も僕だけが異
 る態度で、然も異なる所を置い
 〇耳にも 這入つた程で
 すが其事が安達さんの耳に傳へら
 れるとそれまで藤椅子に足を組
 ると脚へてみたのを急にギン
 委りしほらしい態度に、早變りし
 て終つた。僕はその傲然たる態度
 と後のしほらしい態度とをフツク
 に變じて他の人達より一足お先に
 失敬して歸つた。閣下を取りま
 てるた
 ○人達は 言ふまでもな
 く都下各社の新聞記者で閣下は新
 聞記者を招いて何事か發表して
 たのであつた要するにその日がス
 フと新聞記者へ通されたのは新聞
 記者のものであるといふと僅儀
 新聞記者と間違はれたからだがま
 ちの功名ではなくて誤られた僥倖
 といふべきだ(池田的比喩)

の都下四五の大都市は、商店の規模が日壯大であるが、
 街衢の延長は、あるかの思ひを為す、亦商店
 街衢の延長は、あるかの思ひ、商店の増設も、人の便利も
 多し、そのうち、木賃を以て大月理を以て、
 近き開放、此の光景、街衢の一部と見せ、
 方々あり、前より、同じ業法が、
 旅館の汽車、汽船の延長は、
 一得して、ある。旅館が、
 接続する、間、不便、
 く、繋つた、停車場、
 る、と、みる、多く、
 可なり、人の、宿、

東京

中央停車場、ホテル、
 こと、較、換、氣的、
 を、現、し、
 何、れ、
 此、
 一、
 も、
 の、
 不、
 こ、

この改正書 善を愛す



漫談

臍の研究

彫刻家 朝倉文夫

あなたのような顔附の人は、臍の穴が必ず右の方に曲つてあますよ——と、試みに、お友達に言つて御覧なさい。

お友達は、少し顔を根らめながら、必ずそれを否定します。併し家に歸つてから、そのお友達は、そつと自分の臍の穴を検査して、それが右の方に曲つてあなければ、始めて、やれ——と、安堵の胸を撫で下すに違ひありません。

あなたのような顔附の人は、臍の穴が必ず右の方に曲つてあますよ——と、試みに、お友達に言つて御覧なさい。

いつ見ても暇さうなのは臍の穴——といふ川柳があります。この暇さうな臍の穴も、曾てその主人が母親の胎内にあたときは、五臓六腑の總門を司つて、主人の生命を保證する重要な職務を持つてゐたのです。

従つて、母体内に於ける十月十日の臍の働き振りが、その御主人の出生後の運命を左右することは、非常なものであります。

功成り名遂げて、お腹の真中に超然と鎮座してゐる彼は、今でこそ尾羽打ち枯して顧るものもないが、人間ならば、勲一等功二級を授けられてもいゝ資格を持つてゐます。

臍の役目は、出生と共に御用済みになつたわけで、時たま、御主人が笑ふときに、茶を沸してやつたり、御主人が怒るときに、曲がつてやつたりしてさへあれば、それでいゝので、他にはちよつと使ひ途もなく、従つてその存在さへも認められないのであるやうな次第ですが、我々彫刻家だけは、大いにその存在を認めて、利用してをります。

彫刻家が人間の姿體を作るときには、先づ第一に臍の位置を決定します。日本人の臍の位置は、その人の總丈を割つて、頭から十分の四、足から十分の六の點にあるのが、一番正しいもので、この點が、すべての運動の起點になるのです。

長男や長女の臍が、弟や妹の臍より小かつたら、病身であるか、短命であるか、または薄倅であります。これは何千人といふモデルの臍を見て、私が統計を作りました。

に反し、大きくて引裂けし。以て奥深く湧込んである臍は、一番上等の運命であります。支那の古人も、「李を容れる」ほど、大きくて深い臍が好いと申してをります。

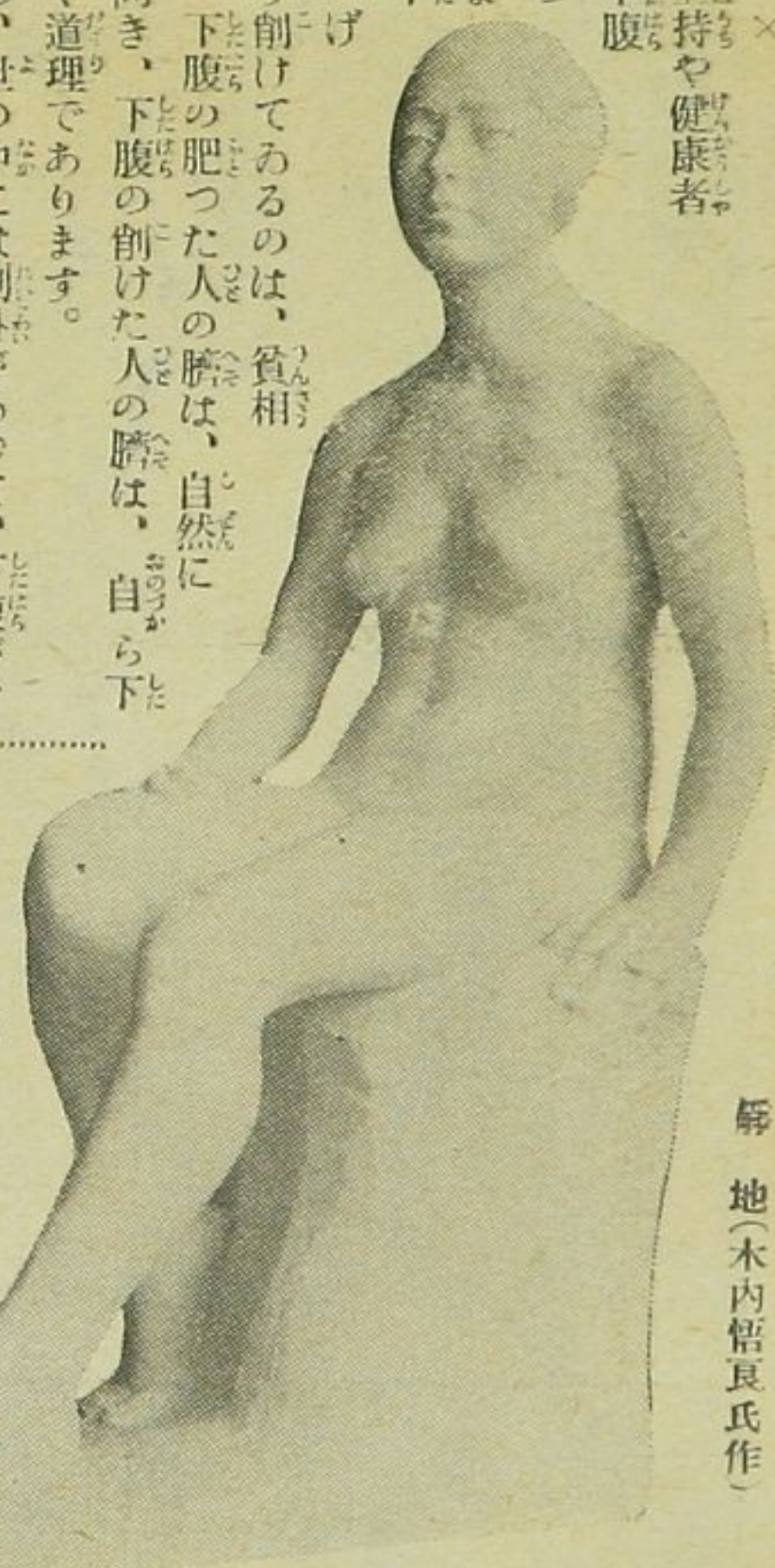
を曝したとき、私は先づ長女の臍を見ます。することが出来ます。つまりその父親なり母親なりの臍が、出臍であつたり、または小さくて、浅い臍であつたりすれば、その子供は病弱で、運命も思はしくありません。



(作スパンペール) ダメロドンア

可もなく不可もなくしといふところがあります。や、上を向いたのは最も幸運で、福祿壽を、併せ享けることが出来ます。その反対に、や、下を向いたのは、不健康で、貧乏で、短命で——まことにやお氣の毒な運命であります。

金持や健康者
下腹



静地(木内悟良氏作)

り削けてゐるのは、貧相
。下腹の肥つた人の臍は、自然に
向き、下腹の削けた人の臍は、自ら下
く道理であります。

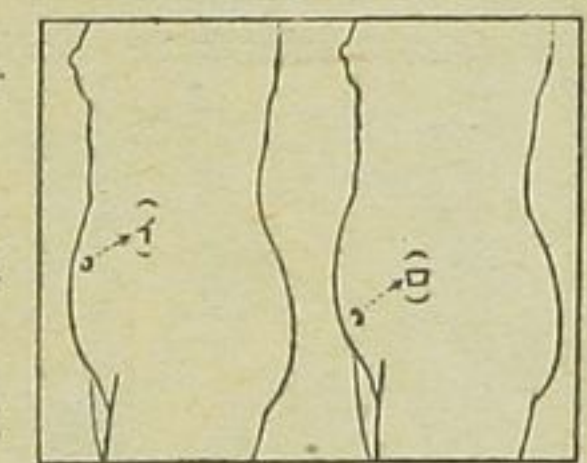
し、世の中には例外があつて、下腹がで
り肥つてゐても、少しもお金が残らず、
不健康に苦しんでゐる人があります。ま
腹が削けてゐても、健康で、生活も豊な
者があります。

んな場合に、臍を見れば、それが例外の
で例外でないことが、よく判ります。

の挿絵を御覧ください。下腹が如何に膨
あても、臍が(ロ)の點にあれば、自然に
穴は下を向き、下腹が多少は削けてゐて

(イ)の點にあれば、臍の穴は必然的に上
く道理であります。

ゑに臍は、なるべく上に附いてゐるのが
で、下二寸ほど不運であります。



臍を相す

宋の陳希夷の秘傳に、次のやう
な一節が傳へられてあります。

臍を、筋脈の舎とな
し、六腑總領の關とな
す。深くして闊きもの
は、智にして福あり。
淺くして窄きものは、
愚にして漸し。上に向ふものは、福にして
智あり。下に向ふものは、貧にして愚
きもの(深いといふ意味は思慮遠く、高き

李を容るゝものは、名人耳に播まる。或は
凸にして出て、淺くして小なるものは、
善の相に非ざるなり。

右の他、支那の人相本には、臍に關する研
究が、非常に多く記録してあります。

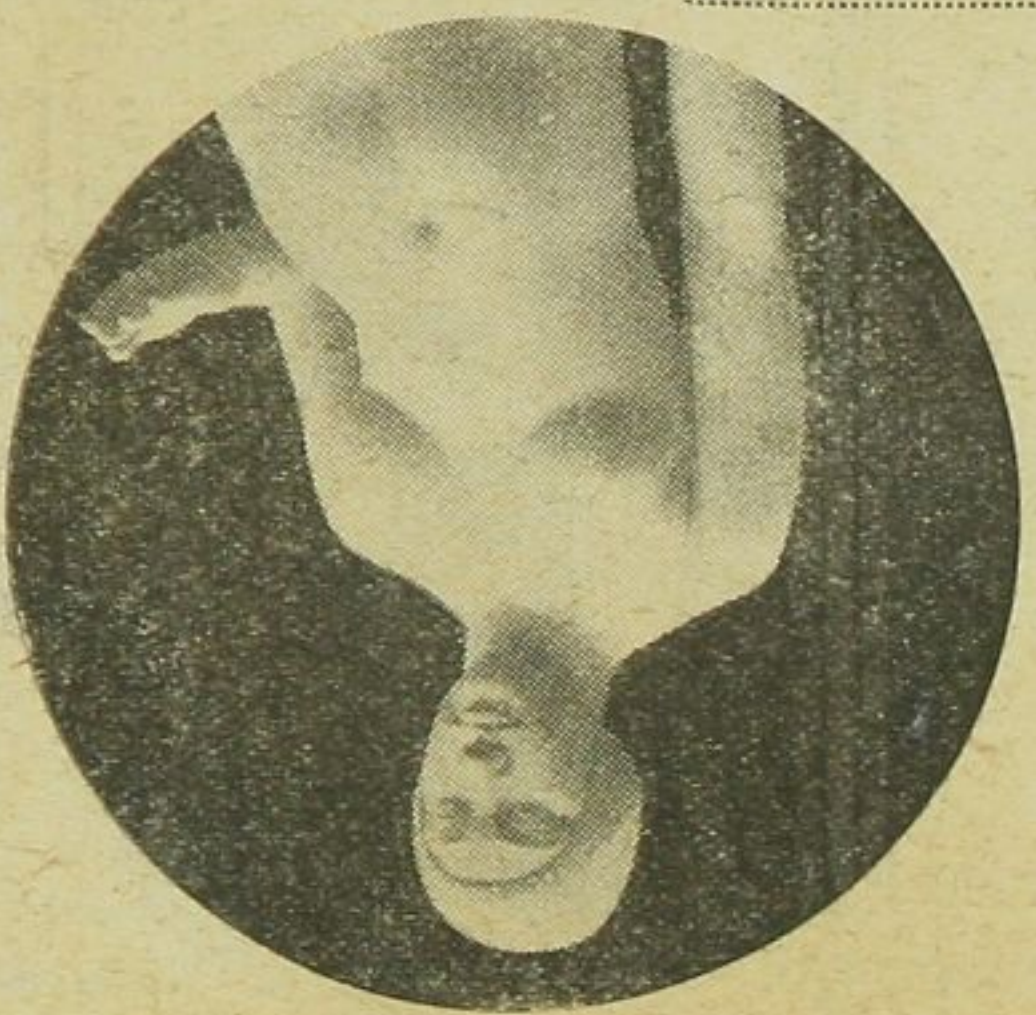
肝腎の本人でさへ、自分の臍の存在を忘れ
勝ちなのに、御苦勞千萬にも、他人の臍を觀
察するといふのですから、如何にも物好き
やうですが、これを研究しておくと、思ひが
けない功徳を得ることがあります。

例へば、天使の像を彫刻しようと思つて、
妙齡の婦人を、そのモデルに備つたと思つた
ところが、皆様も御承知の通り、この世の中
には、天使のモデルになれるやうな潔かな純
な婦人といふものは、そんなにたんとあるも
のではありません。

多くの場合、身も心も荒み切つた婦人が、
我々のモデル臺に立つことになりました。これ
では如何に神妙な顔附をしても、天使のモデ
ルにはなれません。

そこで私は、一策を案じたのです。モデ
ル女が、何食はぬ顔で我々の前に、裸形の身

大體さすか(赤坂中兵衛作)



やれ、右の女は、自然に臍が下を向き、
左の女は、臍が上を向き、これは、
下腹が削けた人の臍は、自ら下を向く
道理であります。

大體さすか(赤坂中兵衛作)



ウ イ ナー スの誕生 (作-リッチッポ)

そして、何気ない様子で「君には兄さんか、姉さんか、あるね」とか、「君は長女に生まれきたね」とか、多年の経験によつて、決して外れつこのない點を、一つだけ言ひ當て、やるのです。

すると彼女は怪訝な顔で、「まあそんなことが、どうしてお判りになりますか。」と訊ねます。口に出して訊ねないまでも、必ず驚いた顔附をします。そのとき、すかさず、斯う言つて聞かせるのです。

「僕等のやうに、何千人といふモデルの姿態を見てあると、その人の性格や境遇、または過去の生活状態などが、一日で判るやうになる。恐ろしいものだね。」

すると女は、單純だから、なるほどさうだらうと合點する。そして、この人の前では、如何に驚つても駄目だと觀念する。だから如何にも神妙らしい顔附なんかしなくなる。技巧を弄さなくなり、飾らなくなる。つまり身も心も亦裸々になるのです。

この瞬間、荒み切つた女は、荒み切つたままで、天使のモデルになれるのです。煩惱即菩提の境地とでも申しませうか。眞即美の法悦境とでも申しませうか。藝術に憑はるもの喜びは、この瞬間に、油然と湧き起るのです。この神輿に乗じて腕を揮へば、賣女を模して天使を描き出すこともできるのです。

瞬間の研究が、馬鹿に難しい議論になつてしまひました。愛嬌者の原君が苦い顔をするかも知れませんが、この邊で打切ります。

何しろ、十月十日の間、不眠不休の活動を續けて、御主人を世に出したところの殊勲者ですから、浮世の五十年を安閑と、風塵の外に起居してあるからとて、邪魔物扱ひをしてはいけません。

樂は苦の種、苦は樂の種といふ、至つて平凡ではあるが、極く實行し難い金言を、彼は身を以てその範を示してあるのであります。

親父の腹を噛つたり、お袋の臍線を挫つたりして、自墮落な生活を送り、よぼくの老人になつてから、火の車を廻さねばならぬやうな浮世の阿呆どもは、ちとお手前の臍に恥ぢ入るべきでありませう。穴かしこ。

横濱新聞

臍を切ると此の流石に裸体と新も藝
術家と思ひつゝある。何人も此を身體に
持つてゐる。無関心であるのや如く事だ。胎内
にある時五五五五を撮取する。結の遺蹟
此とすんの大切味もある。身結を断つた
痕跡と考へん。胎面の赤い痕跡が美
を呈する。やうにもあるが、それ程痕跡を
て忘るゝものも。裸体び之を露けすを羞
恥もせらるゝ。性、之が愛嬌もさるゝ。さして
痛みのやうな此の痕跡、泣きさうな外巧の
ひある。か一後胎を揺らさるゝ。此後後
主の友と見え、さうして切腹をぬく。さして

十一月十日

○及人作村良久が近年菊表を手に栽して、こころも其の
おもふ節と多うたのみ招かれ、柏木の丘をたうと一境しれ
かきかゝ上出来び、自今先づ葉のつき方は目とほき
下葉が三流と着いてゐるのを見れば褒めよう、若
といふ所の葉の裏の無味のことも分つてゐれば、
らきりも若に北極をさがちせんやうといふ云ふは、
ハ作村十勝を病んで外出が出来ない所から冷方さうい
四五年前から始つたといふ。五七の人の招かれれば
多くの各社支社の名記者で菊の味もつた人といふ
つは、自今の前年野に英世が入る振う、朝の時の
ことを思ひ出し、丁方菊のしんすいひあつたから
英世を勧誘し、四枚の種を、久し振りに視る。四の

菊表をえんとする感があるといふは、英世もまた
冷淡い、●本回の菊一向に、英世一といふは、
加て、いんどころむい、非多の直あひあるとい
ふは、いんことを説き出すと、産交ののうあゝ、
米利加の直いけんも、すく切り花とするの死から
葉の切着くといふ、め、何れもその直いあゝ、
外人の花の多きをを、葉と鑑賞する
ことを知る、随つて、観賞すること
知る、いん、実の、不徹底で、真の菊を味ふよ
ハ、何れの花の眼と、葉の美大が
花の美を、相互相倍り美を、あるといふ、
東西の鑑賞、根本的におあひあゝ、十月十日



古稀祝賀に於ける四光生

十一月早稲の収穫に余等古稀祝賀の記念
 として此の園に其の老幼を偲ぶるに
 幸なり

口近の不幸を余等が憂ふ所なり。都下の大難地を
 是の稀にして吾輩を感ずるに、是れが實に大
 害災が、爾方も吾輩に倣うて、お前が料理店が
 間ある方法に、飲食をせしむる、否か、能方、出来
 る、是れが補法からんて、ある、異時、店を修る、店を
 回し、ゆるぎ、設備がある、の、是れ、料理店、影響
 を受けてある、お前、実の料理店、其樂
 の、ゆゑ、こゝの、養者を、揚げ、の、理、なる、ゆゑ、
 の、今の世の中、いかに、不便、ある、億、計、ある、飲食

かまむあつとすん、簡易の方法が出来てゐる。富の限
る。自分の投ずる酒は嗜むか下物は多く要らぬ。よ
どこの盛衰をこぼつとも腰帯は若きものけしよのよか
十の八九を占める。酒は具をかきよんか賣するもの
の物に用ひる。酒は具をかきよんか賣するもの。自分飲
ふにけしよの選りぬる主義は嗜むよかよをも一二元
寄するものせんか海山のよある。或は商家に或は物を
吟つて商家に地の物をかきよんかよ。国おんか
擬産にあらぬものやうなぬきうものを選りぬる
ものか自分自身の血上の大響を産む。世の中か
進んで選りぬる主義はかうしてくるもの。民衆の味は
投する酒法のよか、大響を産むから得た味はし

何一のものでもするが簡易の故に出来た。かうする
つては、酒の味は選りぬる。自分の全体氣を味平
る人間は後所好「主義」とも云ふべき。か何ん
けとも選りぬるものやうなぬきうものを選りぬる
味を持ちぬるものやうなぬきうものを選りぬるもの
選りぬるもの結果は、酒の味を多く後
けんとも大部のよかを通流するものか極むかある
何んか、酒を賣すものやうなぬきうものを選りぬる
ことも自分の柄をよか、つて放縦むかあるもの
の纏つたよかが出来ぬ。自分の己が流儀
が散漫の結果を生ずることを取つたよか、生
れとどうするものも出来る。

表見庵

百
昨日の事、雨、今朝も雨、
事ともいふく思ひ出、
人比ら面白からうと、
自今、
比、北人の田舎、
の仕事、
や裏を打つ所や、

のり

趣味ある無つた

あとも見、
と面白く、
思ひ出、
後七表見、
自今、
比、
の仕事、
や裏を打つ所や、

自分か書畫に趣味を感じたのは二十五年以後のことだ。書畫の趣味を生じて、多少直接な交流のある仕事と表をこぶの自由の道行があるが、早く幼年から此の二藝で趣味を感じたのを多分と見て目撃したる記述はあらず、併し切に時代に佛壇を此の以て長い間自分の家におく、父の末でおれにとかある、その仕事場へも四つおびえ出さず金泊をおくおや木地と布と着物を穿、トコトをつけたり、漆を練のりするやうな工程を目撃し、面白ういと思ひろ、何故かぬしやを職業とすることもお欲しううぬ、いさゝく美術二藝のあるけん、おの

づから取捨のテニハラメントがあるのもあるか、進んで長し書畫を弄ぶ、秋のうつせから、表の裏の真似ことをやつて見たり、拙りも出来上ることを愉快に感した、ついである時感して、名畫の真似や汚損を繕うか、其の折れやシワをパッチリ直して之れを相商の製を造りて立派な出来の時、いかにある愉快か、あつた、表を不ど原紙の器量を上けるよ、その出来上る時、名書畫に日々親しむ、他の二藝も内徳得かあると、志わし、亦ある時、考へた、表を裏とさうてハ襖七張、後ろす、日帳の外、顔面や帳や巻子七色、飾り、さう、いさゝく困ること、他人の依頼とある、いさゝく傍者画ひも、慶持ひ、手掛け

しか致味を感じて居る境況に於ては、関係がそのもの物を職
 とすること、出来たものがある、却つてに、致味と
 するものを職とせざるは、世の中、の常である。
 自合の十数年、印刷業を営む自合の社名と
 つてある、高きや、学利を好まざる、自合が唯一の
 多社に、関係し、此の事業が自合の、因を致
 味、交渉があるから、此の職、自合の中
 心、味とする所である、自合の、経歴、ち、年、時代、は、活字
 じ、如、も、活字、に、終、る、ま、あ、る、こ、ん、の、自、然、の、関、係、に
 あ、る、け、ん、ま、あ、る、の、こ、と、知、時、期、待、し、し、ま、あ、る、に
 無、つ、れ、

活字の因縁
 一將印成り、萬骨枯

一將印成り、萬骨枯、と、軍、陣、に、多、く、の、士、卒、を、
 一、を、犠、牲、と、して、切、一、將、に、ゆ、さ、る、こ、と、を、い、ふ、は、此、の、
 一、將、の、活、字、に、よ、る、の、合、せ、高、か、あ、る、と、云、へ、ら、る、。 藝、
 術、大、慶、為、揚、。 其、の、建、築、某、技、師、の、一、人、を、成、す、と
 云、ふ、は、け、だ、他、。 漫、印、さ、ん、て、の、日、煉、化、を、一、ツ、一
 ツ、務、り、上、げ、ら、れ、此、の、大、建、築、の、出、来、ま、い、の、あ、つ、て、何
 ぞ、何、十、萬、の、士、卒、を、煉、化、を、積、み、累、み、た、る、か、
 況、か、士、卒、の、名、を、比、ま、す、べ、き、あ、る、の、に、ま、ん、な
 事、。 今、一、州、知、事、に、切、一、技、師、に、ゆ、す
 べ、き、あ、る、。 活、字、を、一、ツ、一、ツ、に、煉、化、す、
 何、方、分、一、名、を、あ、へ、さ、細、ら、ま、い、を、毎、日、心、に、版

の後業
 一全の事
 小全く

活

を世に示す。職の務が愛用のそのまゝに於て其の持てるべきの
 功を以て表す。表すは又謝するに其の掛り長が
 多いが偉いと思ふ。自分も印刷
 会社の社長としてあるから多くの職工を犠牲に
 してその功を成し遂げた。何が見るべきか
 其の功が社会に与へる利益よりも事業の
 発展のための犠牲となるか。余は出版業の
 発展のため印刷会社に役員として出資し
 印刷会社の社長に就く。この事業に
 携はるべき人は印刷会社の社長に就く。
 印刷会社の社長は印刷会社の社長に就く。
 印刷会社の社長は印刷会社の社長に就く。
 印刷会社の社長は印刷会社の社長に就く。

多くの文化に於いてその功を成し遂げた。
 自己の心から多くの功を成し遂げた。
 多くの文化に於いてその功を成し遂げた。
 自己の心から多くの功を成し遂げた。
 多くの文化に於いてその功を成し遂げた。
 自己の心から多くの功を成し遂げた。
 多くの文化に於いてその功を成し遂げた。
 自己の心から多くの功を成し遂げた。

○活版印刷術が興へてから甚速をなす程のよき人
 七活版活字の交渉がわつる因縁がある譯だが自
 づから其の内、七深い因縁がある、或人と一生を
 通して活字と縁因を續けてゐる。自分のちと年、
 ハ活版術のまゝに印権をもちあつたが此の文の
 の利基がとんとは花い心：興味を持てたが知る
 い。活版の七八年、自分が新法を授け、其のまゝ
 といふ頃、新法の印権をもちあつたが此の文の
 西評●新法の記書が載せられた。とんが抑々自
 分の業、成つたよか活字に組まんと此の始め
 といふ活字に觸るは、前記にある。當時の印権

の心よりいと嬉しむ。恐らく私が後年以
 前記あると志し此項作は、甘茶のいこゝと、
 といふもあつた。私に帝大に入學中、同人と主権論
 を著して、其の在るを出版せんと、元元院に運進し
 此文を活版に附し、自今の手いれ、或堂論が
 取らんたうか、在りて、活字に觸るは、
 経験で、帝大を去つたから、内外活字の事柄といふ
 日刊活字の起して、茲に較つた、或、活字、
 活、核心を生じ、或、或、或、或、或、或、
 の講義が活版に附して、傳刊され、其の後、二冊
 の本を纏つて、活字の論とすつて、世に出た。其頃、
 二方面の活字が創生する、
 といふ頃、
 といふ頃、

から業を執り、爰に日之活字を觸るることなると
か、當時は、此の活版工場の中を設け、他
の印刷会社を依頼した、編輯の、おこし活版
機械の動く、声の、よく、ことを得る、うら、其後、
活版の、主著、に、迎へ、て、前後、六年、間、在、社、し、て、
又、活字、の、原因、が、統、は、ん、た、新、活、を、あ、つ、て、
か、る、い、高、田、半、峰、の、後、を、承、け、て、漢、を、新、活、の、主、業、
と、す、る、と、云、ふ、こ、し、く、活、字、に、新、人、に、此、社、に、
編輯、の、職、工、が、置、
れ、る、を、呼、ぶ、聲、の、編輯、所、に、変、こ、へ、て、初、め、
の、比、が、後、ま、身、も、場、も、陽、氣、に、思、ひ、ん、た、
此、活、編、
輯、の、聲、の、編輯、の、終、る、ま、も、在、社、し、
又、う、ら、

二、活字の、記、事、の、排、列、順、序、を、
活、版、の、記、事、を、一、項、毎、に、活、字、に、
か、ら、げ、て、あ、る、の、を、
の、中、に、
つ、て、見、ん、こ、と、も、あ、る、
の、組、を、取、つ、て、
其、直、に、組、ん、で、
こ、く、活、字、が、
同、じ、と、あ、る、が、
ん、ま、い、自、身、も、活、字、の、

し此の如き。私に誤謬を遺すべからざる早稲田
大書の出版事業を遂行し、是れが数十年の
まむ及んである。初めの諸義親にけを刊行し、此が進歩
の物に出版するや、最初、東京英会に印刷を頼
んが、是れの間、今、ぬのむ、日本印刷所を起すこ
とを考へ、此、自分が主宰し、て、なる、第四の印刷
刷分社が、是れである。日清戦争が終り、此頃、東京
ほか、大の半地名辞典の編纂を、合して十三年の、星雲
を、稿へて、完成を先け、此、い、て、自ら、其、て、意
初、に、是、後、上、の、援助、を、し、此、の、む、ある。弘文館と云
ふ、書、種、が、未、刊、圖書を、賃、刊、見、と、合、を、圖書、行
会、を、起、し、多く、の、名、著、を、世、に、出、し、此、い、て、自ら、が



終始、進、つ、て、数年、と、及、ん、び、終、文、館、と、云、ふ、書、種、が
文、の、編、合、と、い、ふ、を、起、し、及、洋、書、の、賃、刊、を、合、れ、し、の
か、後、も、自、分、の、手、で、帰、し、今、高、は、自、分、の、手、で、進、行
し、て、ゐ、る。此、に、随、時、自、分、の、手、で、撰、ん、だ、尚、記、紀、念、組、の
十、数、種、あ、る、内、編、纂、の、数、は、二、百、一、つ、に、よ、り、大、隈、友
七、十、五、年、史、が、可、り、自、家、の、著、述、の、一、つ、あ、る、は、
自、傳、の、逸、事、が、あ、る。印刷、印刷、合、社、の、社、長、は、ま、か
ら、う、つ、た、が、事、業、合、社、に、干、渉、す、る、を、厭、し、る、の、自、分、が、ま、か
ら、印刷、合、社、の、社、名、を、議、し、た。ま、か、ら、以上、の、如、く、自、分、の、一、生、
ハ、一、身、も、し、活、字、に、因、縁、が、あ、る、ま、か、ら、ま、か、ら、自、分、の、執、味
と、希、本、も、あ、る、か、ら、あ、る。ま、か、ら、自、分、の、活、字、行、経、歴
ハ、長、い、け、ん、を、活、字、印刷、の、ま、か、ら、的、智、識、の、ま、か、ら、新、合、社

進まざるのハ道域ひある。

北地雪語の著者とすつてある。敏後給米致之
の家を信つてある馬路の予前記の先年信り
多けを記すや守り、守り入んて置きとるが今次
春敏後書子と刊の二つを雪語に殊に關係
ある書秋のみをぬめ、前刊の書子にぬめ
柔山と雪語の神童と先とさう、むれ、雪
語に關係なき馬路考の前の書一ハ十枚
枚ありて、おもしろきあり、もろきあり、あつた、
尋ねるかめとなす、旅りつげ、他のり、杖抱、

雪語

世とんとするもの也

十日土の記

○馬路の十通を親同しり付の、簡中なる、
十通を會者をも止むの、おの、旅路の、信り、
あらま、の、致汗、勤、の、一、体、九、と、保、く、も
交う、ふ、一、と、も、氣、後、の、を、馬、と、ぬ、仁、と、る、う、け
じ、式、ま、す、と、も、一、と、ぬ、一、と、ま、ま、と、も、一、と、免、し、
ぬ、仰、一、九、の、深、世、才、一、の、に、一、と、衆、へ、極、し、と、も、お
進、歴、の、先、り、と、も、一、と、鉄、の、お、の、格、お、る、と、も、一、と、こ
らの、手、あ、ま、中、く、不、傳、と、も、の、あ、る、と、も、一、と、傳、彼、に、

不倭を弗と倭語を止の此後あるの利に
此巻を考かきありてしるす也廿一年
ひくたせとのいれ此書の倭語一向氣入るぬを
尤もこの中へ止むる事とあるしこも倭を自
得の形得るに何とありとありて七年の事

この七つある時を考に
とにききみ、此の父在世のころは殊なほのえん
究るに父及十一年の事

門づくの昔も七柱の條のころ
このとき双松庵にありし御書河原宮の
この前なるもいへん一、
ついでこの句を羅丹の徳とん、

十一書の時入る前を考に
お七ひ、きし、
はて

かよふある千世の道よりと記す
十四年の事あると主家を建ちたると
あるにありけりついでなりし即ち
貴人の事

木からしるの
この時あるありし
ら七才らしき家
しるす
まの意を記す

又古雅をるひしつ三四年の絶え是もその好む
 とせしつて本歌をよまんと思ひしつて歌を
 古歌をよまふかあるものと思ひ歌をよまふか
 といふその故又也ひに歌をよまふか古歌を解
 し得たか益ありと思ひおと古歌を解するとい
 心を苦しめしつてその故又思ひおと古歌を
 心苦の未だしつてつて其の言のよをせんと思ひ
 こみ是れを思ひつて古歌をよまふかといふ
 一人の好むか或る思ひおとをよまふかといふ
 考へ句を練ふこととあるか決しとせずあるか思
 めしつて古歌をよまふかといふと云ふはつて
 一首一詞の世にしつて廿餘年前の世の句の好む

平流もいふていふの世の句をよまふかといふ

歌也心去例借の古言也とあるか道歌の解借を
 平流もいふていふの世の句をよまふかといふ
 ありの自伝おと古人再考をよまふかといふ
 とあるか今の世の句をよまふかといふ
 例借もいふていふの世の句をよまふかといふ
 多し洗州念をよまふかといふの世の句をよまふか
 山某の例借の世の句をよまふかといふの世の句をよまふか
 力おとあるかあるかあるかあるかあるかあるか
 心併この世の句をよまふかといふの世の句をよまふか
 かく況つてうらあひの脚を廻生か鼻おとめきと
 やうな世の句をよまふかといふの世の句をよまふか

伽羅多うけ馬海の大天物おあがし
○馬あう人に世を教するを若千の潤ちをたふこと
や人の功りさうのうるさきことやらを細うの作しと
る世状あがの術氣も見ゆらも一後文をさす人
に接するの思あし

かゝりの誇りも似てむとこころもさし
と推ひさき思素を速り笑は痛く是れ板あひ心
易る徳もさしこの徳をさうの用換てさし
先年らの束のたのころとたふさうさし
車あの謀の備ひを極画録の何れ偏而の何
能志さしとんさし何れと潤ちをさす
是れさき野郎もさし文人のあまみ

さうさし何れかささし何れもさし見もさし
人さし何れも何れもさし何れもさし何れもさし
のまらさし何れもさし何れもさし何れもさし
さうさし何れもさし何れもさし何れもさし
をい世をさし何れもさし何れもさし何れもさし
さうさし何れもさし何れもさし何れもさし
さうさし何れもさし何れもさし何れもさし
高人の自畫賢人の偏さし何れもさし何れもさし
人さし何れもさし何れもさし何れもさし何れもさし
人おさし何れもさし何れもさし何れもさし何れもさし
かしりやかか何れもさし何れもさし何れもさし何れもさし
内をたのむとえさし何れもさし何れもさし何れもさし

只に世産物をもぬんじ記を菓子にほけしとある
あるにほけしもののみかたをあとのこころも
くはれ名をとらふもの記しとる糖家現利
ていゝとあるとあるとあるとあるとあるとあるとある
の一二をうじとぬんじ記を菓子にほけしとある
漢すといふ人のことありけり

是は十年あまう速徳の御徳の御徳の御徳の御徳の御徳
後し重名をとらふひろくわい畢ん後悔は
山さくもせしつとぬんじ記を菓子にほけしとある
名をまらうとあるゆゆゆとあるゆゆゆとあるゆゆゆとある
折りい花とくのかたのゆゆゆとあるゆゆゆとあるゆゆゆとある
ゆゆゆとあるゆゆゆのゆゆゆのゆゆゆのゆゆゆのゆゆゆのゆゆゆのゆゆゆ

此玉さくら花を唱へてさくさくのまか
たもあまうしおのれと徳もあまうし
さくらにせんにをぬんじ記を菓子にほけしとある
袖の巻末あり人ことぬんじ記を菓子にほけしとある
るにあり

三四年以前浪元の市人紀伊島尾行しといふ
か文ありてれら十年の昔をもとらうしとある
思ひけん人懐一面をおとらうしとある
くれ但知ぬとあるとあるとあるとあるとあるとある
ゆゆゆとあるゆゆゆとあるゆゆゆとあるゆゆゆとある
ゆゆゆとあるゆゆゆとあるゆゆゆとあるゆゆゆとある
ゆゆゆとあるゆゆゆとあるゆゆゆとあるゆゆゆとある

此志のやうな物に類つてきりうしが元初あるの
 物と志をいふべしうつくうぬもの(比方)うけ
 あつては後のついでに先こころをきき上つて
 あつてはあつてしうつくうぬもの(比方)うけ
 うけきりしをぬきまをやく(比方)なるもの先
 のあつてしをぬきまをやく(比方)なるもの先
 つげあつてしをぬきまをやく(比方)なるもの先
 今此の心馬鹿七のともあつてしをぬきまをやく(比方)なるもの先
 と思つてしをぬきまをやく(比方)なるもの先
 又三四年に於てあるは侯のついでに先こころをきき上つて
 ついでに先こころをきき上つて
 うけきりしをぬきまをやく(比方)なるもの先

後ひしはあつてしをぬきまをやく(比方)なるもの先
 あつてしをぬきまをやく(比方)なるもの先
 ついでに先こころをきき上つて
 おもひあつてしをぬきまをやく(比方)なるもの先
 いづれに先こころをきき上つて
 あつてしをぬきまをやく(比方)なるもの先
 今此の心馬鹿七のともあつてしをぬきまをやく(比方)なるもの先
 と思つてしをぬきまをやく(比方)なるもの先
 又三四年に於てあるは侯のついでに先こころをきき上つて
 ついでに先こころをきき上つて
 うけきりしをぬきまをやく(比方)なるもの先

や疎にあらざるしひもひこすも老人のたまはるしゆ族
元最也宿するて方所くありり仁に法をのせ
合ふし先方りゆれを主歌して遠さけりけ
うんれいおんもりしころわんもあつてねさぬい
或とあつてくんとしの人を三又二つの子をい
この二十年の事うの事いひの事い伊勢の人何
し杜若を三人きりおく上系し花山流を
い出いいたるいしお大御物いゆゆいいしと由事
の御書をい徳とすしもの事い徳い家令の流
大夫ら流状をい別伊せしうてんらるるおん
こころの流事都ある人南左は将徳とす仁り先
日花山流をい此出いお大御物流事いゆゆ

節のあつていひも老人のたまはるしゆ族
あそと存のうくくしと流流いしとあつて
こころらその事いしと流流いしとあつて
い流流いしと流流いしと流流いしとあつて
うしと流流いしと流流いしと流流いしとあつて
のいしと流流いしと流流いしと流流いしとあつて
い流流いしと流流いしと流流いしと流流いしとあつて
あつて流流いしと流流いしと流流いしと流流いしとあつて
あつて流流いしと流流いしと流流いしと流流いしとあつて
又流流いしと流流いしと流流いしと流流いしとあつて
あつて流流いしと流流いしと流流いしと流流いしとあつて

りつは娘のみよし独居者ニシテ、
けさの白波中の彼より主を、
作し此上のおまの娘なり、
一きり、
石壁にの仁才の才也、
りつは、
眼を、
まぢり、
梅あり、
りつは、

略(平集) 梅あり、
りつは、

ぬえを自然に比し、
珍

不傳近年字を能く、
入り梅、
くつ交り、
そのけ、
し是、
の致、
美神、
己、
この、
実を

又學のいふは下と不信の人と云ふを論し、
是れは生れざるのいふと爲す時行を始のゆゑに
づこのあはせざるのいふと成くとも悪なる
まのうらふことなり 不信を生得故に多かる
のこのいふ言のちいふとありにを記す
ちういふとありこのあはせざるのいふと成くとも
ら聖賢の教とあるは悪なるはまはるゝ
いふいふのいふを不信するといふは
自然の如し世の交りいふは自然の終り
この外に切也といふは天

兼利寺の池

空の旅

永見徳太郎

— 空 —

立川飛行場では、陸軍の飛行機が、翼を擴げてならんでゐます。而して、あちらでも、こちらでも、緑の草の上で、爆音をたてたり、大空を翔けまわつてゐるのです。

九月十七日。天晴れ、氣麗かな好天氣。太陽から吐き出す光線が、ギラ／＼輝やいてゐました。

Fokker Super Universal 機の、シリンドラーに、ガスリンが送られてゐます。厚翼のベニア板、機を色彩するコバルトが、まるで美しい天使の如く、勇者の如く、がっしりと目立つてゐるではありませんか。

プロペラが、大きな響をたてて轉廻し初めます。廣場の草が雜倒されるやうに、風の力に押さへられました。すつと背後の桑畑がざわ／＼と騒ぎをみせてゐるのです。

私達は、機上の人となりました。爽快な旅客室の大椅子に腰をおろしますと、お腹のあたりを、バンドでしめるやうになつてゐます。ガラス窓から、四方の眺望を好くするやうに作られてゐるのです。

地上では、見送りに來た家族や、會社の人達が手を振つた

り、ハンカチをあげたりしてゐるのです。私が手をあげてゐると、グワ／＼と音たてながら、機がドン／＼走り初めしました。

耳に綿をつめてゐても、騒音は強いものでした。廣々とした飛行場を、スピードかけて走りますと、山や森、人家が、大傾斜して眼の前に迫つてゐるではありませんか。これが旋回上昇、螺旋を描いて離陸した一瞬間の印象です。

間もなく、機が平靜の位置になり、空氣を後に押しつけて動くプロペラが眼にとまりません。

大地を離れた一瞬の下には、地球の縮圖が、展開してゐるのです。

翠然たるカラーは、蒼穹の高く極りなきを示してゐるではありませんか。冷厳崇高なる山岳は、征服せられて、低く伸びてゐるのです。

遠くに、眞實に遠くに、滄溟茫茫たる太平洋が、銀色に眩しく光つてゐます。

背ろの席にゐた航空會社の方が、「八王子が見へます」と書

(11)

— 旅 —

いた紙片を、渡されました。機中は話聲が聴へませんから、筆談のみです。私達は、遙な八王子の町を見下し、多摩御陵に向つて禮拜いたしました。

立體形である可き樹木が、山が、丘が、家が、すべてベチヤンコに潰されてゐる様に見えました。電信柱や、汽車のレールが目につきません。人の蠢きは分りません。何んと關東の狭いことであらうか。と考へさせられました。萬物悉く玩具の感じでした。

兩翼は、大きく張りながら、空氣と摩擦してゐる譯です。遮るものは、ただ空氣あるのみ。

鳥一羽近づかうと致しません。地上、海洋を悠然と見詰めながら、私の身體は、今や大空に存在するのです。耳に慣れるとプロペラの音も、邪魔ではありません。實に愉快です。氣が段々と大きくなつて参ります。空の旅を危険視する人を笑ひたくなります。

横濱は、遠くはボケてゐました。江の島は、盆石の小石と同じです。

富士山は、やはり偉大な姿です。頂上より下にかけて、赤紫を帯び、屏風をたてたやうです。裾野に近く、白い雲がいくつも棚引き、何處から見ても、立派な繪でした。出發したのは、午前八時三十分。十二分間の後には、大山

の上にあるのです。峻しく雄々しい山は、雲に包まれやうとじてゐました。

雲が、機をめぐけてドン／＼飛んで参ります。それが、煙のやうに散るではありませんか。

松田を飛んだと思ふと、もう箱根ごへでしやう。素晴らしく早いに相違ありません。

湯本の赤い屋根、七曲りの道、駒ヶ嶽等を迎へては去りま

す、まるで、急速度の映畫を見るやうでした。

千五百メートルから、千メートルの間を、昇つたり下つたりです。千メートルは三千三百尺になります故、千五百で約五千尺といふ高所を翔けてゐる譯です。

双子山を越へると、碧水泓澄たる蘆湖の小波が、富士の山影を倒に落してゐたのです。離宮が際たつて綺麗です。言葉に盡せない絶景です。

高山を飛ぶ時には、動搖が一寸あります。山と湖は、氣流がよくないのだと聴きました。

無線電信所からは、四五人の人が、旗をふつてくれました。初めて人の姿を明瞭と見詰め、嬉しい氣がいたしました。

箱根は、僅か十五分で過ぎたのです。昔の長い道中は、全の夢のやうです。三島の上では、右手に天城山が霞みます。伊豆の方角でしやう。長汀曲浦がつづいてゐるのです。懐中時計を出すと、九

時二分を針が指してゐました。室内の溫度 F 八〇度 C 二七度。

平坦な大地に、沼津の人家がズラリと認められます。八百メートル位になつたのでしやう。人が蟻の大ききです。豆人寸馬と昔の詩人は、高い所より見下してゐますが、豆人寸馬ではありません。航空用式の文字が、白宇でぬますと、畑に目立ちました。

灣、島、岬、濱の美觀は、美しいと叫ぶばかりです。同乗の大阪三品取引の重役貴志喜四郎氏が「愉快です」と紙に書かれました。私は「素晴らしい」と返事いたしました。沼津より海上に出ます。波が静かで、縮縮を敷ならべた眺めです。塵の如き船が浮かんでゐます。Stereo-Jumelle の望遠鏡でピントを定めても、よく分らなかつたのです。煙が細く漂ふてゐるのは汽船だと、點頭れた譯です。朝霞が、富士に迫つてゐる詩的な氣にうたれました。

平家の武者が、驚いた富士川の洲が、友染模様の如く見事でした。川口から海には、眞青と眞白の二つの色が、區別されてゐるのは、壯觀至極です。

又、黒潮がヒタ／＼と押し寄せるのも、よく分ります。小灣をなした砂原が、三保です。三保の松原は、ただ青い線に描かれてゐます。羽衣の松なんか、そんな小部分は分りません。松にしても、杉、檜にしても、區別出来ませぬ。

洋食を喰へるときはテーブルに、飾られる海草のやうなものです。灣の中に、長方形の物が澤山あるのです。あれはなんでしやう。」と社員の方へ筆談いたしますと、「海苔を作つてゐるのです。」との答へでした。

午前九時二〇分、千メートルにて、久能山と静岡を見下しました。東照宮は分りませんでした。岩繪具で塗つた繪具の様に、山が眺められるばかりです。此處等で、富士山が遠くへ離れます。一盤、一盤、一曲、丹崖、讚峯を眺みますと、岡部の大井川になります。雲助の物語も、笑話です。今では肩車でなく、飛行機へと進歩した世の中です。

大井川上で、一寸ローリングしました。試みに大きな聲を出してまますと、英語の發音のやうに響きます。天龍川のあたりが、大阪までの道程半分でしやう。小山は無数にあります。砂漠の盤紆の様です。而して、山と森の區別がよく分らない程です。離陸の頃には、足にも、腰にも力を一ぱひ入れてゐましたが、此處では、ただ愉快になつて、口笛でも吹いてみたいのでした。

濱松では、突如ヒョイと身體が宙になつたやうに動きましました。これは氣流の關係です。氣流の濃ゆいとこ、薄いとこを通るためだせうです。湖上の水、色濃ゆきは、濱名湖です。少々、機が揺れますが、景色はパノラマです。辨天島が、小

時二分を針が指してゐました。室内の溫度 F 八〇度 C 二七度。

平坦な大地に、沼津の人家がズラリと認められます。八百メートル位になつたのでしやう。人が蟻の大ききです。豆人寸馬と昔の詩人は、高い所より見下してゐますが、豆人寸馬ではありません。航空用式の文字が、白宇でぬますと、畑に目立ちました。

洋食を喰へるときはテーブルに、飾られる海草のやうなものです。灣の中に、長方形の物が澤山あるのです。あれはなんでしやう。」と社員の方へ筆談いたしますと、「海苔を作つてゐるのです。」との答へでした。

午前九時二〇分、千メートルにて、久能山と静岡を見下しました。東照宮は分りませんでした。岩繪具で塗つた繪具の様に、山が眺められるばかりです。此處等で、富士山が遠くへ離れます。一盤、一盤、一曲、丹崖、讚峯を眺みますと、岡部の大井川になります。雲助の物語も、笑話です。今では肩車でなく、飛行機へと進歩した世の中です。

さく／＼擴がります。時計を見ると、送つてくれた家族が、家に歸り着いた頃。何んと空の旅の早さよ。

豊橋が、道程の三分の二位です。九時四十四分、ふり返へると、富士が遠方でした。海上を快走してゐますと、景色の變化がありませんでした。「如何したんだらう。」吃驚してプロペラーを覗きますと、やはり動いてゐるんです。後で知つたのですが、氣流の關係だつたらしいのです。

速力は、始終百五十マイルから、百三十マイルの間。私は果物をたべたり、四方を眺めたり、全くいい氣持になつてしまいました。

汀の近くでは、白いものが、むくむくと現はれては散り初めるのです。それは數數の白浪で、シャンペン酒の泡を見せるやうで、デコラチーブな物でした。

畑に、白い粒々が、何百と現はれてゐます。望遠鏡で靜視して、それが鷗だつた事を知りました。赤土畑の色は、特によく目につきます。宇治山田の方角を望み、名古屋を振り返りましたが、朦朧としてゐるのみでした。

伊勢灣を渡り初めました。千五百メートル、百三十マイル十時二十五分。七分間で横断し、四日市、龜山も過ぎ、山又山嶺です。太陽が、暖くさしてゐるので、樹木も畑も天鰐絨の如く、

華美でした。琵琶湖は、水溜のやうでした。比叡山は、雲に被れてゐ

ました。伊賀の上野の向ふでは、吉野、高野山と思はれる高山が、

伏起して重なりあつてゐるのでした。小山は、蛇々と走つてゐます。笠置山の丘陵嶮崖も、庭の築山です。その下を流れる木

津河は、帯のやうです。月瀬梅林、何處だか探す間もありま

せん。木津を通過してから、間もなく嫩草山が山頂だけ現はして

くれました。東大寺や興福寺等の伽藍が、何時見てもビュチ

ーフルです。鹿も見へず、猿澤の池もありませんが、天平

時代を偲ばずにはいられません。美術の都、名勝の都、宗教の

都が消へると生駒山で、神社の境内にケイブルが、細かいモ

ザイックです。八百メートル、十時五十六分。さんよりと曇つた大空に、飛びこみますと、下界からは、

煤煙が幾百筋も、すく／＼と立つてゐます。いよ／＼目的の

大阪です。さつ／＼と降下いたしますと、ブレーキをかけたのと、地

上についたのと、ゴトンゴトンと、激しい音が響きまし

た。愈々着陸。木津の飛行場で、私達は、元氣に降りました。二時間三十

分で、大阪までの空の旅を終つたのです。

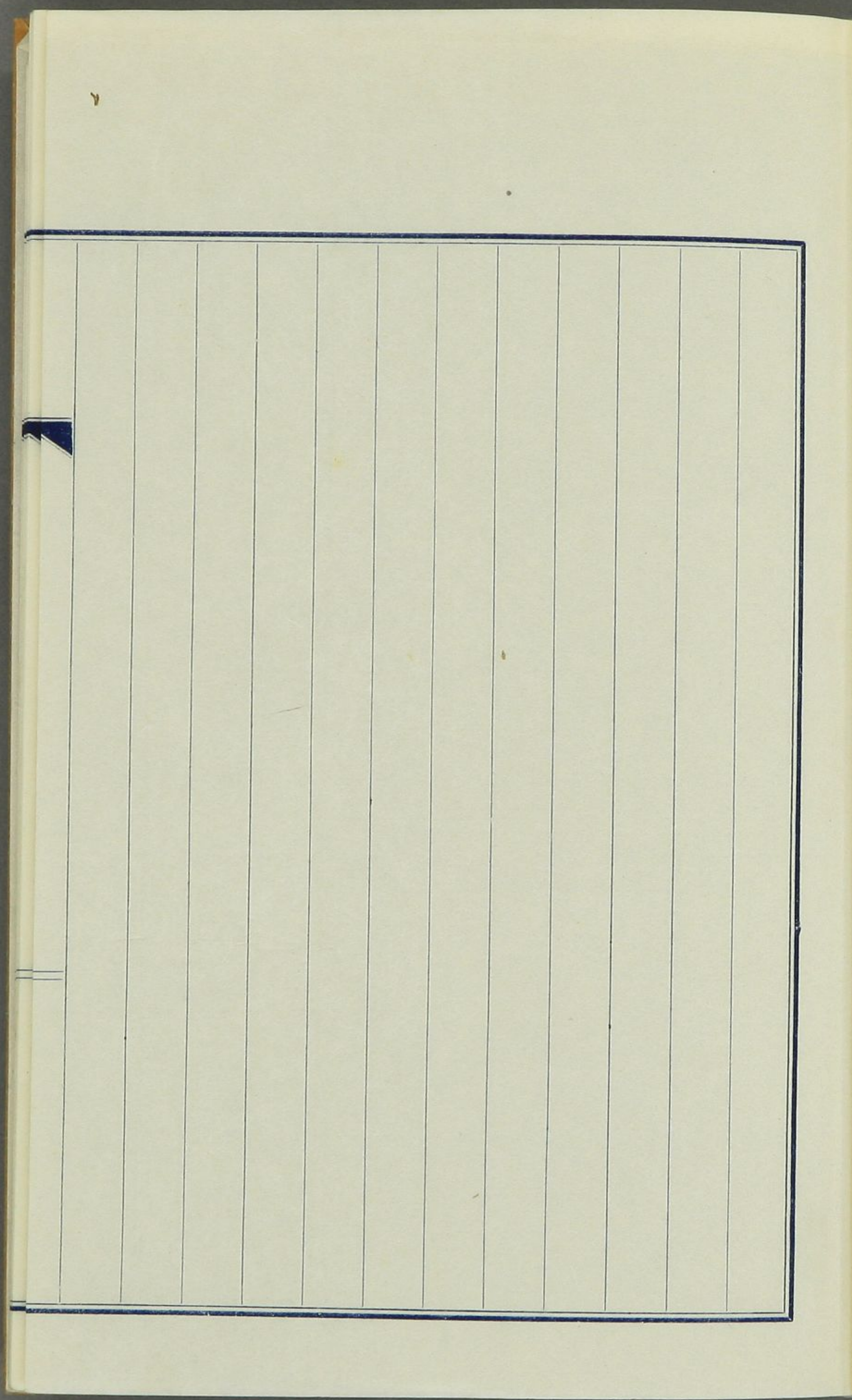
歸路も又、飛行機にて一飛いたしました。その時は、朝霧の奈良や、伊勢の雲の海、浪と雲と抱き合ふ遠州灘、雨中の富嶽。千二百メートルより百二十メートル間の目新らしき風光を稱し乍ら、航空會社社長西野惠之助氏、神戸の水野トメ子夫人等を同乗いたしました。

その感想を、簡單に言ふ私の言葉では

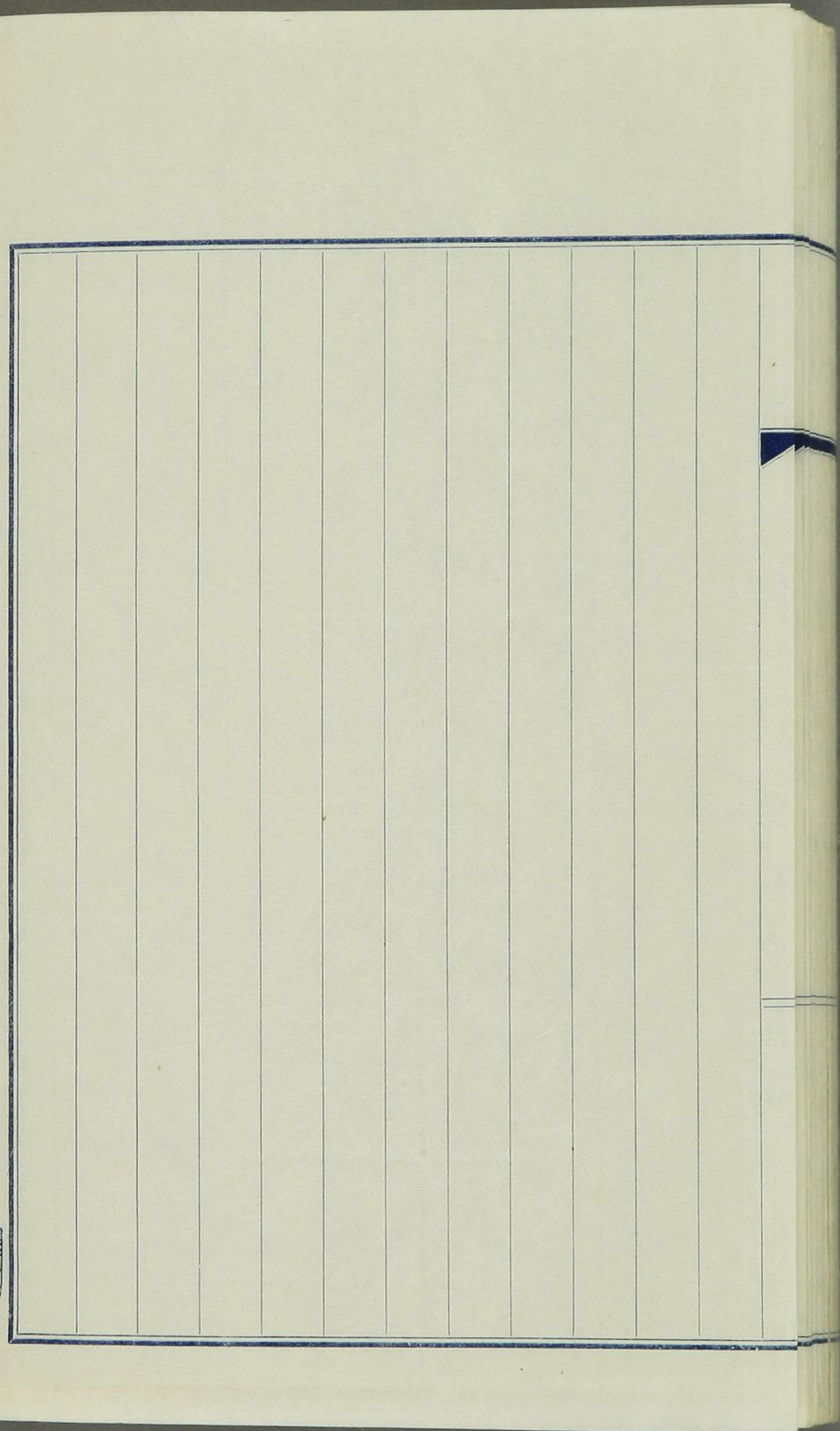
「飛行機は、南洋のマンゴスチーンと同じですね。喰つてみねば分りません。乗つてみねば分りません。とても愉快ですよ。」と。

何時までも墜落、衝突を危険視するなら、汽車、汽船、自動車、電車皆危い物に相違ありません。

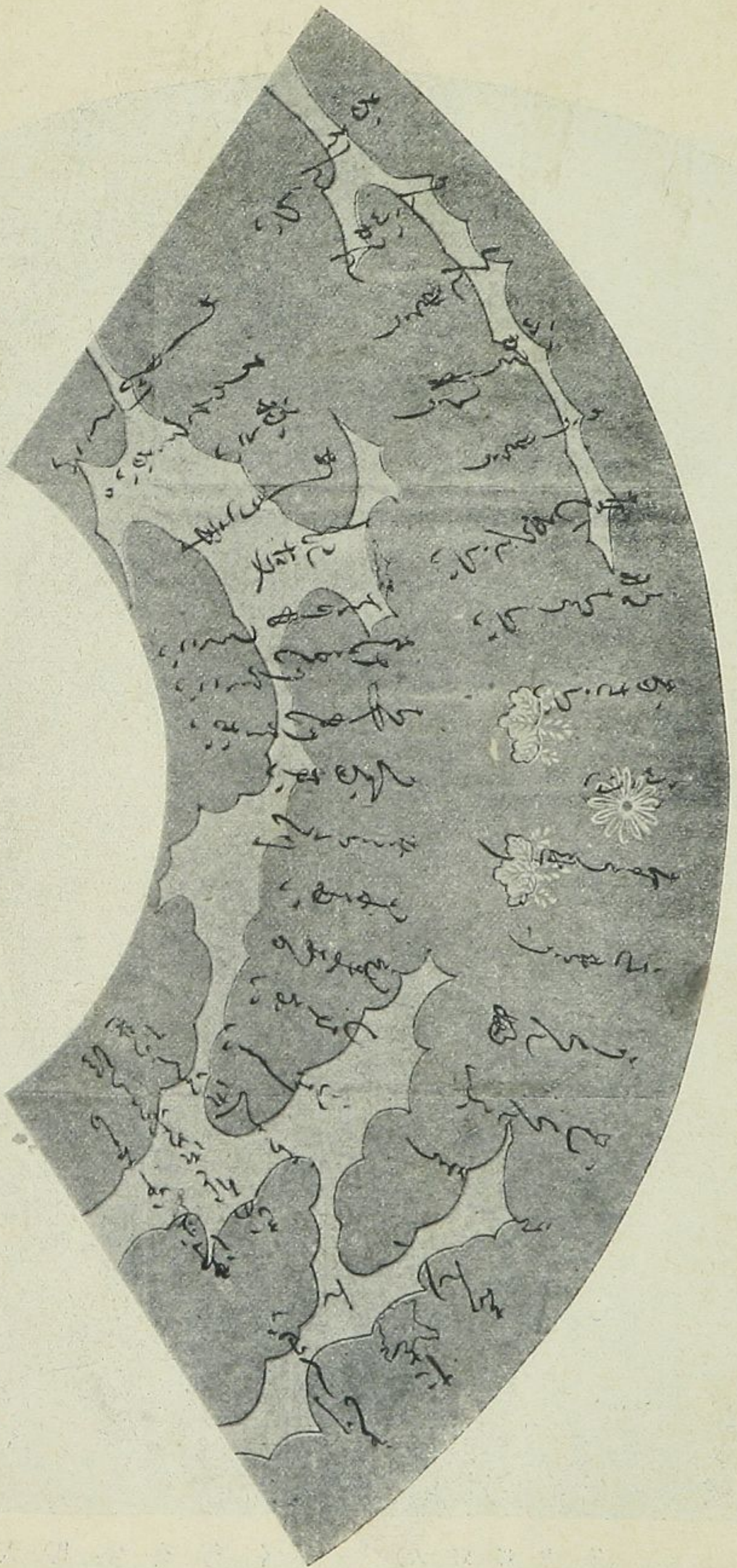
新時代の尖端を味ふ可き器は全く飛行機ですよ。



標
製

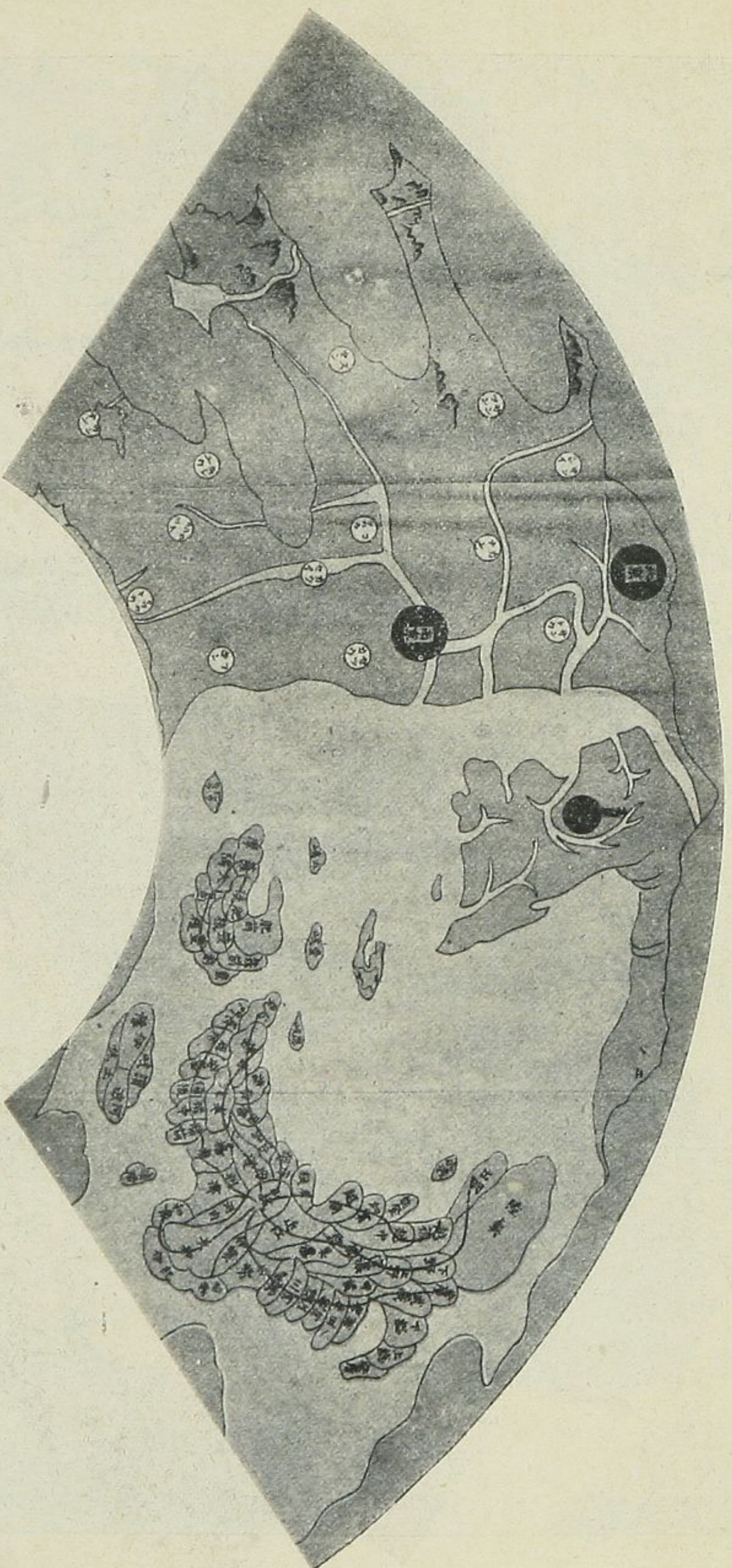


以下
5丁
白紙



(のもしせ習練の身自問太し祖を語譯び及語那支)

面扇の閑太豊



(く指を圖雄の略經陸大)

面扇の閑太豊

